

「本」という扉を開き、自己を探究する旅へ

奈良県学校図書館協議会 会長 市原敬子

「第七十一回青少年読書感想文奈良県コンクール」ならびに「第四十三回奈良県読書感想画コンクール」において、晴れの榮譽に輝かれた受賞者の皆様、誠におめでとうございます。また、今日まで子どもたちの感性を温かく育み、支えてこられた保護者の皆様、そして日々の教育現場で読書環境を整え、熱心にご指導いただいている諸先生方に、心より敬意と感謝を申し上げます。

読書とは、ページをめくる指先から、無限の「好奇心」と「想像力」を解放つ行為に他なりません。本の中に描かれた世界に触れることで、皆さんの心には新しい思考の種が撒かれ、瑞々しく芽吹いていったことでしょう。

しかし、心の中に芽生えた思いを、他者に伝わる「言葉」や「絵」という形に定着させることは、決して容易なことではありません。自分の心にある、まだ名前のつかない感情を適切な言葉に置き換える。あるいは、心に浮かんだ情景を一枚の画に描き出す。その過程で行われた「推敲」——すなわち「書いては消し、描き直してはまた考える」という粘り強い葛藤を経て、皆さんの思考はより澄み渡り、揺るぎない表現へと昇華されたはず。この完成までの道のりを乗り越えた皆さんの情熱に、私は最大級の敬意を表します。

私自身、幼い頃に『ぐりとぐら』や『いやいや園』で感じたあの高揚

感、今でも昨日のことに鮮やかに蘇ります。また、国語科教員として歩んできた三十年余りの月日の中で出会った『万葉集』や『源氏物語』などの古典は、私の人生の道筋を照らす明かりとなりました。古都奈良を故郷と呼べる喜びも、こうした豊かな読書体験を通して、私自身の誇りとなりました。

現代の学校図書館は、単に静かに本を読む空間から、自ら問いを立てて旅をする「探究学習」の拠点へと進化を遂げています。本を入りにして未知の世界に触れる「図書館探究」は、翻ってみれば、自分自身の価値観を見つめ直す「自己探求」の旅でもあります。

受賞者の皆さん、今回の受賞を大きな自信とし、これからも「本」という名の扉を開け続けてください。そこで培われた洞察力と表現力は、変化の激しいこれからの時代を歩んでいく皆さんにとって、何物にも代えがたい最強の味方となるはず。結びに、本集が読書の喜びを広げる一助となり、奈良の文化の灯として輝き続けることを願うとともに、「奈良の学び推進プラン」に掲げた読書活動がさらに発展することを祈念いたしまして、巻頭の言葉といたします。

目次

第七十一回青少年読書感想文奈良県コンクール

奈良県教育委員会賞

◇小学校低学年の部

課題読書 『ワレワレはアマガエル』をよんで
自由読書 『ぼくはアフリカにすむキリンといっています』をよんで

山添村立やまぞえ小学校

一年

村田 光翼

1

田原本町立田原本小学校

二年

川口 明日海

1

◇小学校中学年の部

課題読書 そのこせい いいね！
自由読書 さようならプラスチック・ストロー

橿原市立真菅小学校

三年

戎屋 心葉

2

香芝市立三和小学校

三年

竹元 充輝

2

◇小学校高学年の部

課題読書 自分らしさの大切さを知って
自由読書 美しき僕たちの無様

智辯学園奈良カレッジ小学部

五年

佐藤 優

3

帝塚山小学校

五年

外山 和樹

4

◇中学校の部

課題読書 みんな生きるのが下手
自由読書 彼の躰を飲みこんだのは

奈良県立青翔中学校

三年

山田 和奏

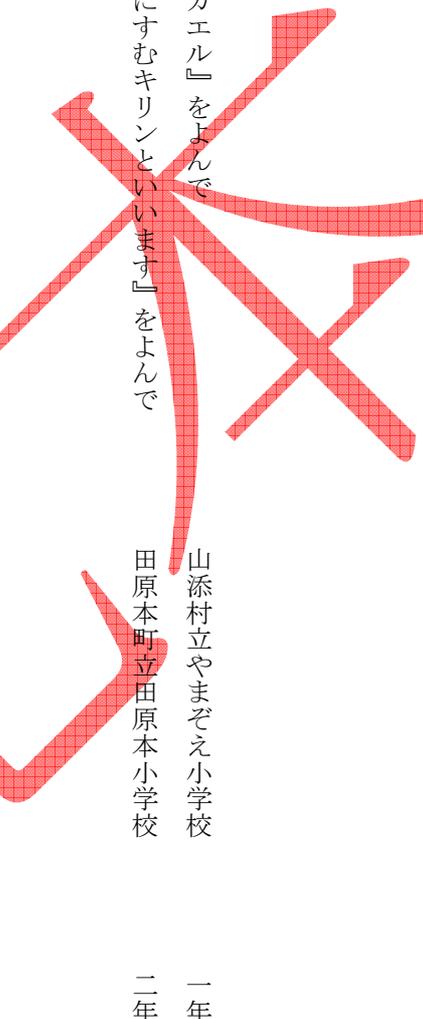
5

生駒市立鹿ノ台中学校

三年

笹元 紬

6



◇高等学校の部

課題読書 立場を超えて
自由読書 AI社会を生き抜くために

奈良県立添上高等学校

三年

若木 七葉・

7

奈良女子大学附属中等教育学校

四年

北村 優季・

8

毎日新聞社賞

◇小学校低学年の部

課題読書 ゆう気を出してつたえてみよう！！
自由読書 うみのいきものをまもろう

奈良市立登美ヶ丘小学校

二年

小林 由奈・

9

大和郡山市立郡山西小学校

一年

中田 滯・

10

◇小学校中学年の部

課題読書 ライチョウを守るぞ！
自由読書 水のありがたみ

近畿大学附属小学校

三年

谷井 風太郎・

10

田原本町立田原本南小学校

四年

信夫 涼花・

11

◇小学校高学年の部

課題読書 わたしだけの色
自由読書 弱さに立ち向かう道しるべ

葛城市立忍海小学校

六年

飯田 愛梨・

12

生駒市立あすか野小学校

六年

西川 心葉・

13

◇中学校の部

課題読書 暗闇の中のドアの先には
自由読書 新しい世界

生駒市立上中学校

三年

宮川 真志・

14

奈良県立青翔中学校

一年

川口 桃奈・

15

◇高等学校の部

課題読書 全ての人が幸せな世界
自由読書 コンビニ人間

奈良県立郡山高等学校 一年 山本 心晴・・・ 16
奈良県立添上高等学校 二年 森野 莉朱・・・ 17

奈良県学校図書館協議会賞

◇小学校低学年の部

課題読書 ライオンのくにのネズミ
課題読書 おもいやるきもちをそだてたい
自由読書 わかるよ、わたしのだいじなめがね
自由読書 ひみつのたからものを読んでほしい

田原本町立田原本小学校 一年 伊藤 瑛茉・・・ 18
葛城市立當麻小学校 一年 久保 心暖・・・ 18
川上村立かわかみ源流学園 一年 大畑 詠万・・・ 19
三郷町立三郷北小学校 二年 金丸 ゆき乃・・・ 19

◇小学校中学年の部

課題読書 ちきゅうのねつを下げるために・・・
課題読書 『たった2℃で・・・』を読んで
自由読書 ココロ屋を読んで
自由読書 つらいをたのしいに

生駒市立桜ヶ丘小学校 三年 根来 さわ・・・ 20
吉野町立吉野小学校 三年 テクセラ 美俐・・・ 21
桜井市立桜井西小学校 三年 北風 帆乃佳・・・ 21
奈良市立朱雀小学校 四年 大歳 隆仁・・・ 22

◇小学校高学年の部

課題読書 僕は僕のままでもいいんだね
課題読書 個性を大切に

三郷町立三郷小学校 五年 福呂 勇太郎・・・ 23
橿原市立晩成小学校 六年 礪山 媛生・・・ 24

◇中学校の部

課題読書 自分の食べられる量で

自由読書 『城の崎にて』を読んで

田原本町立北中学校

一年 中川 陽彩

25

奈良県立青翔中学校

二年 河井 恵人

26

◇高等学校の部

課題読書 『銀河の図書室』を読んで

課題読書 人と人がつながるということ

自由読書 生まれてごめんなさい

奈良県立青翔高等学校

一年 坪井 さわ子

27

奈良女子大学附属中等教育学校

四年 日潟 恭子

28

奈良県立添上高等学校

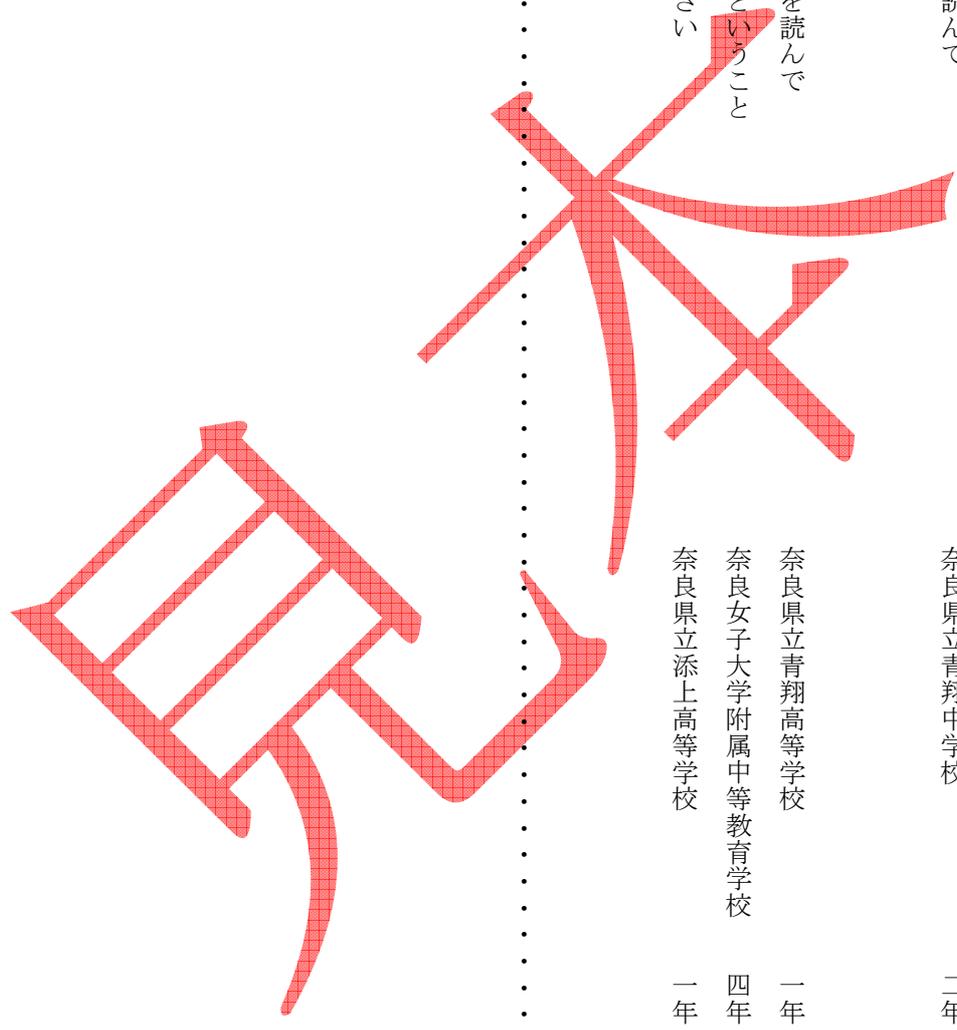
一年 井上 茜

29

審査概評

.....

31



第四十三回読書感想画奈良県コンクール

優 秀 賞

◇小学校低学年

指定読書 にじいろのうみ

自由読書 みんなでしているおにぎり

平群町立平群南小学校

一年

平田 結花

33

平群町立平群南小学校

一年

分部 蒼大

33

◇小学校高学年

指定読書 G氏の思い出

自由読書 真の一步

橿原市立耳成小学校

五年

名村 知紗

33

斑鳩町立斑鳩小学校

六年

伊佐地 由芽

33

◇中学校

指定読書 夏の記憶

自由読書 あの世界

奈良県立青翔中学校

三年

井 千佳子

34

奈良教育大学附属中学校

二年

上田 瑠奈

34

◇高等学校

指定読書 自然と人里の間

自由読書 心を繋ぐアート

奈良県立高田芸術高等学校

一年

橋口 舞

34

智辯学園奈良カレッジ高等部

一年

稲垣 百花

34

優良賞

◇小学校低学年

指定読書 ひなが生まれてうれしいな
自由読書 ふつうのペンギン

平群町立平群南小学校
奈良市立朱雀小学校

一年 谷村 咲季・
三年 石井 称乃果・

35 35

◇小学校高学年

自由読書 秋の林の中で

奈良県立ろう学校

四年 坂井 美和・

35

◇中学校

指定読書 この銃弾は忘れない
自由読書 ときめき箱

奈良教育大学附属中学校
生駒市立鹿ノ台中学校

一年 山ノ川 朝陽・
二年 西畠 彩英・

36 36

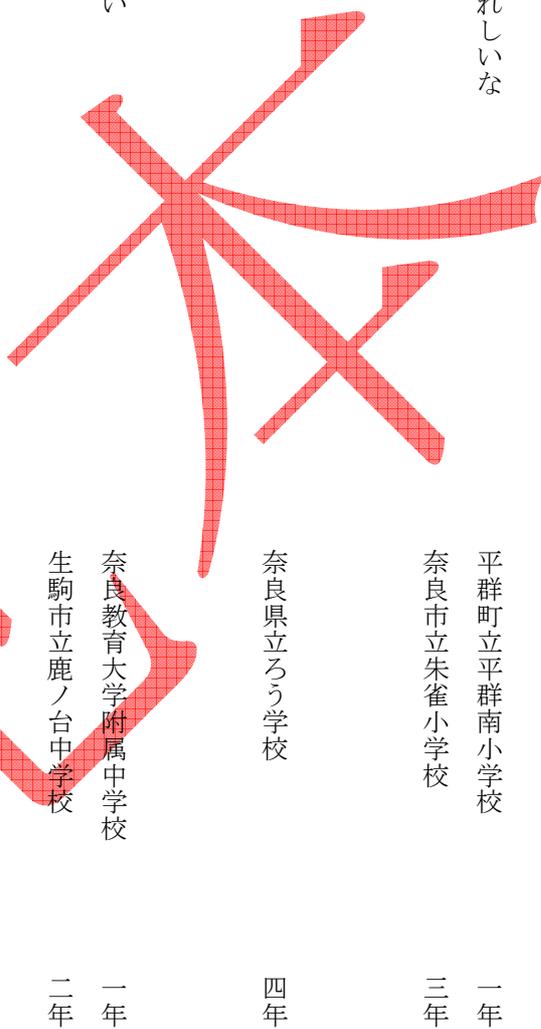
◇高等学校

指定読書 やなやつとwebbing
自由読書 こころが映す世界

奈良県立奈良北高等学校
奈良県立高円芸術高等学校

一年 伊佐地 虹心・
一年 宮島 日奈子・

36 36



奈良県教育委員会賞

◇小学校低学年

課題読書

『ワレワレはアマガエル』をよんで

山添村立やまぞえ小学校 一年 村 田 光 翼

ぼくのじいちゃんはおこめづくりをしている。だから、ぼくもたんぼによくいく。はるになりカエルのこえがきこえはじめると、たうえのじゅんぴもはじまる。

アマガエルのほんをみたとき、だいすきなたんぼとカエルに、いつきにひきこまれた。

ぼくは、アマガエルのことを、どれくらい知っているだろうか？はるにきこえる、カエルのがつようはとうみんからめざめた、カエルのこえだった。なきぶくろをふくらませてなくこえにつられて、メスがきてくれ、たまごをうむ。あたらしい、いのちのはじまりに、ぼくのこころはぼかぼかした。おたまじやくしのたんじょうだ。ぼくも、ごはんをもりもりたべるけど、おたまじやくしも、ちいさなおくちで、なんでもたべる。いっばいたべて、うしろあしがはえ、まえあしがはえ、おおきなちにかわり、しつぽがなくなり、りつぽなカエルへんしんだ。

ぼくのすきな、かめんライダーみたいで、かっこいい。みずのなかでのせいかつが、りくにでられるようになるなんて、ワクワクするとおもった。アマ

ガエルのごはんはむしとった。からだごととびかかり、むしをつかまえるすがたも、かっこいい。しかも、まるのみするそうだ。かまずにたべて、おなががいたくならないのかなとしんばいになった。ほんのなかのアマガエルとめがあった。おおきく、かわいいひとみで、ぼくをみてくれている。ぼくのいえのたんぼのカエルに、あいにくきなくなつた。あついでみずのなかでおよぐのはきもちいいだろうな。ぼくも、プールでアマガエルのまねをして、およいでみた。

いなほもできて、もうすぐいねがりだ。アマガエルもとうみんにむけてじゅんぴするのかな。アマガエルのおうちを、ずっとまもつていきたいな。

また、あいにくからね。

松橋 利光 著 『ワレワレはアマガエル』(アリス館)

自由読書

『ぼくはアフリカにすむキリンといます』をよんで

田原本町立田原本小学校 二年 川 口 明日海

この話は、アフリカにすんでいるキリンが、見たこともないペンギンというどうぶつと手がみのやりとりをするお話です。

ふたりは、すんでいるばしよも、見た目もぜんぜんちがうけど、手がみのやりとりで、友だちになる

ところが心にのこり、あたたかい気持ちにもなりました。手がみでつながり、気持ちをかよわせることができるんだとわかりました。すがたがちがつても、すむところがちがつても、友だちになれるのがすてきです。手がみつて心と心をつなぐまほうみたいだなと思いました。

なつ休みに、家ぞくで大きか・かんさい万ぱくに行きました。そこには、いろんな国から来た人たちがいて、ちがうことを話していたけれど、えがおで手をふつてくれたり、「こんにちは」と声をかけてくれたりしました。わたしも「ハロー」とこたえました。ことばは全部はわからなかったけど、気持ちがつたわつて、なんだかうれしくなりました。もつとその人たちの国のことや、くらしについて知りたくなりました。この本のキリンのように、わたしも、いろんな国の人と手がみのやりとりをして、友だちをつくれたら、すてきだろうな。わたしのすきな食べ物も、日本のあそびのことをおしえてあげたいです。この本をよんで、ことばで心がつながることがわかりました。ことばをつたえあうことで、たのしいきもちやうれしい気持ちひろがっていきます。つながった気持ちは、わたしたちの毎日をもつとあたたかく、たのしいものにしてくれると思います。わたしも、これから、いろいろな人と気持ちを分け合いながら、やさしい気持ちを大せつにして、すてきな毎日をすごしていきたいです。

岩佐めぐみ 作 高島純 絵 『ぼくはアフリカにすむキリンといます』(偕成社)

◇小学校 中学年

課題読書

そのこせい いいね!

檀原市立真菅小学校 三年 戎 屋 心 葉

わたしがこの本をえらんだ理由は、「ねえねえ、なに見てる?」の題名にどうしてなったのか知ってたからです。

わたしは、聞こえ方が少しびん感です。人がたくさんいる場所は、落ち着かないし、しずかな場所では小さな音が気になります。耳せんをしていると、はじめは、少しからかってきたクラスの友だちもいたけれど、さい近は、からかってきたりせずにひとめてくれて、わたしが耳をふさいでいたら、ちゅう意をしてくれるようになった友だちもいます。そんな時わたしは、安心して、うれしい気持ちになります。それに自分は、そのままがいいと思えるようになりました。この本の主人公のトーマスさんとわたしは、少しにていると思いました。

十二さいのトーマスさんは、色覚異常の男の子です。まわりの人と見え方がちがうと言われているけれど、自分ではちつとも気にしていません。

そこで、トーマスさんと同じテーブルにすわっている家ぞくそれぞれの見え方と考え方を想ぞうして教えてくれます。たとえばこの本に出てくるお母さんは、科学者だから、数字・単位・学名

などでまわりを見えています。弟は、家ぞくの中で一番小さくて、まわりがとつても大きく見えます。

トーマスさんは、「人はみんな、まわりの世界を自分のメガネをかけて見てるんだ。」と考えました。

わたしがこの本で心にのこった言葉は二つあります。一つ目は、「人それぞれ」です。

なぜかという、人それぞれちがいがあっていいと思つたからです。

二つ目は、「自分では、ちつとも、へんだ、なんて気はしないんだよね……」です。理由は、みんな感じ方がちがっていいと思つたからです。わたしが思う感じ方には、見え方・聞こえ方・はだざわり・かおり・気持ち・考え方がふくまれていいと思えます。

筆者は、この本でなにか他の人とちがうところがあつてもそのままの自分で十分すてきで、かわらなくていいとつたえたいんだと思いました。

この本には、むずかしい文章がなくて、絵もたくさん書いてあるので分かりやすかつたです。いろいろな人に読んでほしいと思いました。

わたしは、この本を読んで人はいつも自分のメガネをかけてまわりを見ているということを知ることができました。これからも、人それぞれのこせいがあることをわすれずに大切にしていきたいです。

ビクター・ベルモンド 著 金原瑞人 訳 『ねえねえ、なに見てる?』(河出書房新社)

自由読書

さようならプラスチック・ストロー

香芝市立三和小学校 三年 竹 元 充 輝

「さようならプラスチック・ストロー」を読んで、

ぼくはとても心がいたくなりました。

なぜなら、ぼくたちが毎日のように使っているストロー、ペットボトルやビニールぶくろは、生分解いせいがなく、自ぜんにかえらず、海の生き物たちをくるしめていると知つたからです。プラスチックのストローはともかるいので、風や海りゅうのつて遠くまではこぼれ、魚や海鳥たちがたまに口に入れてしまつたり、食べ物とまちがえてのみこんだりしてのどにつかえたり、おなかにたまつてしまうそうです。

ぼくは、ジュースをのむときやアイスを食べるとき、プラスチックのストローや、スプーンをあたりまえのように使つていました。でもこの本を読んで「もしかしたら、そのあたりまえで海の生き物たちをこまらせてしまうかもしれない」と考えるようになりました。

本の中で、「ストローはいりません」とことわつてのみ物をコップからちよくせつのだり、プラスチックのストローのかわりに紙や竹、金ぞくせいのストローを使つたりしている人の話が出てきました。ぼくは、これなら自分にもできるかもしれないというれしくなりました。

ぼくの家では、スーパーやコンビニに行くときにマイバックをもっていきます。さいしょはめんどうくさいな思っていたけど、すぐに「あたりまえ」になりました。だから、いらぬスプーンやストローをことわったり、くりかえし使えるものをえらぶこともすぐにぼくの「あたりまえ」になると思えました。

また、この本を読んでから、ゴミをすてるときにちよつと考えるようになりました。ぼくがすてたゴミが、もしかしたら海にながれていつてしまふかもしれないと心ばいになるのです。だから、できるだけゴミをへらすようにしようと思えました。

ぼくは海や海の生き物が大好きです。海がゴミでいっぱいになって、海の中の魚やカメ、海鳥などがこまっていたらいやです。だから、これからは本の中で出てきた9さいの男の子のマイロ・クレスクんのように家ぞくや友だちにも「ストローはなくてもいいよ。」と話してみたいです。小さなことかもしれないけれど、みんなやればきつと大きな力になると思います。

「さようならプラスチック・ストロー」を読んで、ぼくがあたりまえだと思っていたことを見直すことができました。これからは海の生き物たちのことを思いながら、良い「あたりまえ」をふやしてできることを少しずつやっていきたいです。

デー・ロミート 文 ズユエ・チェン 絵 千葉茂樹 訳 『さようなら プラスチック・ストロー』

(光村教育図書)

◇ 小学校高学年

課題読書

自分らしさの大切さを知って

智辯学園奈良カレッジ小学部 五年 佐藤 優

夏休み前に行った本屋で、課題図書の中から一番最初に目に入ったのが「ぼくの色、見つけた!」という本でした。表紙の色がきれいだったことと、自分の色って何だろうと心がざわざわして、すぐに手に取りました。

この本の主人公は、小学五年生の信太郎。彼は生まれつき、赤系の色が識別できない色覚障害があります。小学二年生の時に、自分の顔を描いた時、口を茶色でぬってしまい、「口にチョコレートがついている。」と友達に笑われてしまいました。他にも、焼き肉の色がわからず、焼けていない肉を食べるうになつたり、熟したトマトが見わけられず、収めできなかったこともありました。でも他の人はどうみえているのかわからず、不自由でもがまんして生活していました。学校でも不便を感じていましたが、それ以上に、お母さんからの過じような心配や、自分は「普通ではない」ということに悩むようになっていきました。

私は、人と同じかみ型にするのがいやなので、ショートカットにしています。昨年は、クラスの男子よりも、短いかみ型にしていました。保育園の頃は、このかみ型のことと、「男なのに、どうしてスカ-

トをはいているのか」や、女子トイレに行くとき「こは女子トイレだから出て行って」など色々言われました。小さかった私は、泣きながらトイレから出て行ったこともありました。今でもしよつちゅう男の子に間違われますが、なかには「そのかみ型、よく似合ってるね。格好良いね。」と言ってくれる人もいます。女子である自分が好きだし、好きでこのかみ型にしているので、今はもう何を言われても全く気になりません。これが私のスタイルであり、私の色だと思っています。

本の中に、信太郎がお父さんと一緒に虹を見るシーンがありました。日本では虹は七色だと言われていますが、信太郎には五色しか見えません。そんな信太郎にお父さんは言います。「虹の色は、見る人や国の文化によって変わるんだ。二色だという人達や六色だという国も結構多い。」

この言葉は、とても印象に残りました。虹が五色に見える信太郎も決しておかしくないという、お父さんから信太郎へのメッセージだと思いました。本を閉じて、気付きました。他の人の色を尊重することはとても大切だけど、他の人と同じ色にならないと悩む必要はないのだと。私の色で、私のキヤンバスに描いた絵は、世界に一枚しかありません。だから私はこれからも、周囲の色に合わせて自分をぬりつぶすのではなく、私自身の色を、自分のパレットに出し、まぜて、試していきたいと思えます。

志津栄子 著 末山りん著『ぼくの色見つけた』
(講談社)

自由読書

美しき僕たちの無様

帝塚山小学校 五年 外山 和樹

イスラエルにはイスラエルの正義があり、パレスチナにはパレスチナの正義がある。

画一的なルールや一義的な価値基準が正義であるならば、四度にわたる中東戦争など起きてはいない。少子高齢社会のつぼ型人口ピラミッドの僕たち子どもがぎゅうぎゅうのガザ地区はイメージできない。

ガザ地区は、食料、燃料、日用品、衣料品が慢性的に欠乏している。なぜ、あのような狭い土地に二〇〇万人以上もの人間が暮らすのか、僕たちには到底理解できない。素敵な地中海をうめ立てて最先端の楽園を造っても、ガザの人たちは喜ばないだろう。子どもたちが大人になったとき、ふたたびエルサレムを奪還しにくるかもしれない。

正義はある日突然逆転する。

大東亜戦争はアジアの植民地解放を目的として、大日本帝国軍の兵隊はたたかった。

勝てば官軍、負ければ賤軍なのか。

僕たちは、それを明治の戊辰戦争で学んでいたのではないのか。

逆転しない正義は、献身と愛だ。

いまガザにあるのは、子どもたちの飢えである。それを「正義」が邪魔をする。国連や支援団体からの援助物資が十分に届かない。

奇しくも、日本は今年で戦後八十年になる。「過ちは繰返しませぬから」

広島市の平和記念公園にある原爆慰霊碑に刻まれている言葉である。この碑文の解釈については長年議論がされてきた。「あやまち」とは何なのか

緊張する国際社会の中で、僕たちが問い続けられているのだと思う。僕は近鉄布施駅で3階の奈良線から2階の大阪線へ乗り換える。エスカレーター一本で実に楽に乗り換え可能だ。八〇年前、僕の曾祖母は布施でB-29の爆撃に遭った。曾祖母は勤労動員で兵隊さんのシャツを縫っていた。突然のB-29の空襲に遭い、曾祖母は逃げお世話だが、隣を走っていた人は撃たれ、命を落とした。

大阪は焦土化した。

何のために生まれて、何のために生きるのか。やなせたかしさんは問う。やなせさんの「アンパンマンの遺書」に、雑草の暮しがいいという一文がある。だが、いまの日本は、雑草の暮しが出来るのか。

米は売り切れ、物価は上がり、十分に食事をとれない子どもが市政の課題となる。ひと月になん度、人身事故で電車が止まるのだろうか。

RADWINPSの野田洋次郎さんは「賜物」という詩のなかで命を「借り物」となぞらえ、「一時が来ればお返しする命」とうたう。

かつこうわるくても、もがきながら生きよう。無様でも一生けんめい、「借り物」のいれ物のなかに人生を詰めていこう。考えて、考えて、考えよう。

正義のために。正義とは何かを。いまを、「命を生きよう。」

やなせたかし 著『私が正義について語るなら』
(ポプラ社)

◇中学校

課題読書

みんな生きるのが下手

奈良県立青翔中学校 三年 山田 和奏

「わたしたちは食べるのが下手、生きるのが下手。」という表紙に書かれた文を読んで、「私も生きるのが下手かもなあ。」と苦笑いした。私は食べることは下手ではないが、頑張ることが下手な自覚はある。一度でも「毎日やる」を遂行できたことがあったらどうか。真面目にコツコツすることは苦手だ。そして一度でも「今日はいっぱい練習する。」や「いっぱい勉強する。」をやり遂げたことはあったらどうか。一気にたくさんのことをする集中力もないのだ。つまり頑張ることは私にとっ

て敵だ。みんなは頑張れる、苦手なこと頑張ることができると、好きなことだともっと頑張れるんだ、と思うと頑張れない自分が惨めに思えた。この本はそんな私の世界を少し明るくしてくれた。

「葵」は会食恐怖症、「咲子」は摂食障害で過食嘔吐を繰り返してしまう、食べることに支配される中学生だ。葵は食べるのが難しいことを周りに言い出せないような気弱な性格なのに対して、咲子は食べたくないから食べたくないとはっきり言うが、少し強がりなところもある性格だ。二人は給食を食べられないという共通点を持つことよって仲良くなり、イスラム教徒でハラールを食べる

ラマワティと、家が貧しいため給食をたくさん食べたいと思っているコッペとともに、「給食改革」を始める。これは給食改革を通して、本当の友情、食べることに命や生きることの繋がりに気付き、成長していく物語である。

この物語を読んで特に印象的だったのは、素直な子だと思われていた葵が母親に対して歯向かった場面だ。葵は咲子と出会う前までは、食べないでだめだと言ってくる母親に対し自分の気持ちを隠していた。しかし、咲子に「なんでも母親に従うわけ？」と言われたことをきっかけに「食べたくないから食べない」とはっきり伝えることができた。

私も「いい子」と言われることがある。本当はいい子なんかではないのにと思いつつもいい子を演じてしまう。「なんでそう思うの？」と聞かれても、本当の思いではなく、「いい子」の返答をしてしまう。葵は私に、時にははっきり自分の意見を伝えることも大切だと教えてくれた。

そして、一番心に残ったのは最後の章の咲子の言葉だ。咲子の母親は放任主義で、咲子がストレスで過食嘔吐してしまう日々を送っていることにも気付いていなかった。しかし、あることをきっかけに母親は母親なりに自分のことを大切に思ってくれていたことを知り、同じように母親も我慢して泣いて戦っていることに気付いた。

その時、咲子は「でも本当は、みんなどこかが不完全で。みんなどこかが不健康で。みんな泣きながら

戦っているのだ。生きていくって、そういうことなのだ。」と思ったのだ。

私も咲子と同じだと思った。私も自分だけが頑張れなくてしんどい、そう思っていたところがあつた。でも、本当はどうだろうか。私以外にもしんどい人はたくさんいるのではないか。私のように、自分では努力したと思っても他人には頑張っていないと言われる人もいるだろう。ベストを尽くしても思い通りにいかない人もいるだろう。頑張っていないのに「頑張ったね。」と言われて素直に喜べなくてしんどい人だって。他にも葵や咲子のように食べられなくてしんどい人、経済的な影響などで出来ないことが多くてしんどい人も。私以外にも不完全な人はたくさんいる。なぜそこまで気がつかなかったのだろう。咲子は、みんなそれでも戦っていること、そして、それが「生きる」ということなのだと思いつかせてくれた。

私は初め、こんな自分は惨めだと思っていた。自分だけができない、自分だけがしんどいと無意識に考えていたからだ。だが、この本を読んで、そんなことはないと思いついた。生きるのが上手な人なんていなくて、みんな何かと戦っている。羨ましいほどになんでもできる人も、憧れの人も、みんなどこか不完全で泣きながら戦っている。そして、無理に「生きるのが上手」な人になる必要もないのだ。むしろ、泣きながらも戦っていくことが「生きていく」ということなのだ。そう思うと心が軽くなった。これから、自分は生きるのが下手だと思ってしまうとき、例えば、勉強が計画通り

に進められなかった時や練習不足で上手く行かなかった時は、みんなも自分とは違うかもしれないけれど何かと戦っているということを意識してみようと思う。

天川栄人 著『わたしは食べるのが下手』（小峰書店）

自由読書

彼の軀を飲みこんだのは

生駒市立鹿ノ台中学校 三年 笹 元 紬

入学祝いの花束。学校代表として選ばれたときの寄せ書きとお守り。卒業する先輩からもらったボールペン。

彼はいつも、大切なものほどなくしてしまう。

「願わくば海の底で」は、そんな“悪癖”に悩まされ、それでも飄々と振る舞う青年「菅原晋也」を中心に編り成される群像劇だ。彼の所属する美術部の部長、同級生の部員、それから顧問の先生へ、主人公が移ろい変わりながら進んでいく。それでも、物語の中心にはいつだって彼がいた。

主人公が変わると、主人公をとりまく環境だって変わってしまう。そんな突然の変化に混乱してしまうから、私は群像劇が嫌いだ。

でも、がらりと登場人物が入れかわった中に見知った名前があると少しだけ安心する。私にとつて、菅原晋也はそういう存在だった。

「願わくば海の底で」は、群像劇であることとにも何気ない日常と謎を描く学園青春ミステリーでもある。東北地方沿岸部にある県立廻館高校を舞台に、学校にまつわるささやかで少し非日常的な謎を解き明かしていく……そんな穏やかな物語だったはずだったのに、この本を読み終えた私はまさきに、「残酷なお話だな」と思った。原因は二つある。

一つは、登場人物のかかえているもの。大切なものを大切にできない、という菅原晋也の不義理な悪癖を筆頭に、第一話では定期試験も模試も好成绩なるときどき無性に悪いことがしなくなってしまう優等生が。第二話では、ただ肉が食べられなかっただけに気づけば人前でご飯が食べられなくなってしまう女子高校生が。第三話では、高校生のころの選択をずっと後悔しつつも正しい選択をしたんだと信じてつづける美術が……というように、本を読んでいる、いわば部外者の綿足からすると「え、そんなこと？」と思ってしまうような悩み事の数々を、彼らはかかえている。本当にささいなことなのだ。しかし、自らの悩み事が理解されないと知りながら、しっかりと向き合って上手く付き合おうとする彼らの姿に私はとてつもない罪悪感を感じた。花束や、お守りや、寄せ書きや、想いのつまった大切なものをこころと忘れていってしまう菅原晋也のような

人が身近にいたら。私はきつと、その人が嫌いだ。あなたのために心を込めたものなのに。大切に思っていないの？思ってるんだったら、どうして忘れてしまうの。でも、それを一番知りたいのは本人のはずだ。

「理解されない」苦しさ「理解できない」苦しさを両方つきつけてくる、そういうところに私は「残酷」だと感じた。

二つめの理由は、物語のいきつく結末にある。「願わくば海の底で」は基本、学年が一つ上がるごとに主人公が変わっていく。「菅原晋也」の高校一年から大学生になるまでをいろいろな人の目を通して見届けるような、そんな感覚だった。菅原晋也の飄々とした性格にふりまわされつつも、あれ、もう卒業するんだ。じゃあ次の話からは大学生かあ。まだ悪癖はなおらないのかなあ。そうわくわくしながら読み進めた私がいきついたのは、二〇一一年三月十一日だった。

彼はいつも、大切なものほどなくしてしまう。その日、東北地方沿岸部をおそった大きな波は、彼から一番大切なものを奪った。

不穏な文句は確かにあった。全く想像できなかったわけじゃない。それでも、そんなお話じゃなかったじゃんと思ってしまう。それまでの学園青春ミステリーは、突如として「高校生時代の回想」に塗りかわる。そこにあたるのは、菅原晋也への追悼の物語だ。一話が終わっても、学年があがっても、主人公が変わっても、変わらないはず

つといた「菅原晋也」という存在は、その見知った名前だけを残して消えていた。

題名である「願わくば海の底で」のそのあとには、いったいどんな言葉が続くのだろうか。海の底で待っている側の思いか。この物語がいきついた先は私が想像していたものとは全くちがっていて、読み終えたときの爽快感などは微塵もなかったけれど、その分深く考えさせられた物語だった。

登場人物のかかえる悩み事を「そんなこと」ととらえてしまった自分にながでるんだらう。

十四年前のあの日には物心さえついていなかった自分にながでるのだらう。

けれど、少なくとも私はこの本をよんだおかげで買われたと思う。三月十一日を迎える旅、私はきつと想う。

願わくば海の底で。

額賀滯 著『願わくば海の底で』（東京創元社）

◇高等学校

課題読書

立場を超えて

奈良県立添上高等学校 三年 若木 七葉

五十嵐大さんの『「ゴード」のぼくが見る世界』私自身の境遇に深く関わっている。しかし私と筆者の立場は正反対である。だからこそ、同じ「家族の中に聞こえる人と聞こえない人がいる」という状況を、逆の立場から知りたいと思いい、この本を手にとった。私は耳が聞こえないが、両親は耳が聞こえている。

「ゴード」とは、ろう者の親を持つ聞こえる子どもを指す。筆者は両親が耳の聞こえない人だったため、幼い頃から自然と通訳役を担いながら成長した。社会の中で「かわいそう」と言われたり「普通じゃない」と見られたりする経験もあったという。しかしその中で、筆者は自分の誇りを見つけて、成長していく姿を率直に書いていた。本全体を通じて、私は共感する部分や、自分自身を振り返させられる部分が多かった。

特に印象に残ったのは、筆者が子どもころから役所や病院などで両親の通訳をしていたことだ。親への愛情や「役に立ちたい」という思いから頑張っていたが、子ども一人では抱えきれない負担もあったという。私は逆に、いつも親に頼って生きてきた。病院も学校もどこに行っても通訳をしてく

れるのは両親だった。それを「当たり前」と思っていたが、筆者の経験を讀むうちに通訳する側の重さに気づいた。当たり前前に思っていたことは親の努力に支えられていたのだ。私は改めて感謝を忘れずにいたいと思った。

また、周囲から「大変だね」「かわいそうだね」と言われることに違和感を抱いたという筆者の言葉にも共感した。本人にとっては日常なのに、外から「かわいそう」と決めつけられるのは心を傷つける。私も「聞こえない生活」が普通であり、不幸ではないのに、他人から「かわいそう」と片付けられるのは嫌だと感じていた。筆者の言葉は、自分の気持ちを代弁してくれているようで胸に響いた。

さらに印象的だったのは筆者が「聞こえない人になりたい」と考えたことだ。両親は聞こえないのに自分は聞こえる。その葛藤から「もし聞こえなかったら、『かわいそう』と言われなくなるのに」と悩んだという。この気持ちは私が「なぜ親は聞こえるのに自分は聞こえないのだらう」と悩んだ経験と重なった。立場は正反対でも、「家族の中で自分だけが違う」という感覚は共通していて、強い共感を覚えた。

一方で「自分だけが違う」という感覚は果たして、耳が聞こえるかどうかだけなのであろうかとも考えた。たとえば兄弟や姉妹間で身長に差があること、親と容姿が異なること、周囲にとっては些細な差であっても、本人にとっては悩みになることは多い。そうした悩みを知ったとき、「自分だけが違う」という感覚は特別なことではなく、誰もが少な

から抱えていることなのかもしれないと思えた。コードである筆者によって、新たな気づきと、自身を振り返るきっかけを得ることができた。

また、本の中で触れられていたドラマの話も忘れられない。聴覚障害者と健常者の恋愛を描いたドラマを、筆者は「障害者が健常者を感動させる道具のように描かれている」と感じていた。私も同じように居心地の悪さを感じたことかある。だが筆者は同時に「知るきっかけになることは大事」とも述べていた。確かに、普通に生きる人が作品を通じて手話やろう文化を知ることには意味がある。実際私の先輩もドラマをきっかけに手話を覚え、私とたくさん会話をしてくれた。そう考えると、知る入り口を作ること大切なのだ気づいた。

この本を読み終えて、筆者と私の立場は反対でも悩みや感情の根っこは似ているのだと思った。

そして「もし自分に将来、聞こえる子どもが生まれたら」と考えるようになった。その子は「なぜ親は聞こえないのに自分は聞こえるのだろう」と悩むかもしれないし、私が頼りすぎれば通訳を背負わせってしまうかもしれない。この本のおかげで「子どもに負担を押し付けられないように自分も努力しよう」と思えた。そして「聞こえていても、聞こえていなくても、自分の子どもは大切な存在」であり、普通に接していきたいという気持ちが強まった。

『「コード」のぼくが見る世界』は、私にとって自分自身を映す鏡のような本だった。筆者の思いに共感するだけでなく、「自分も家族にどれだけ支えられてきたか」「将来どんな親になりたいか」な

ど、多くのことを考えさせられた。読んで終わりではなく、この本から得た気づきを忘れず、感謝の気持ちを持ちながら生きていきたいと思う。

五十嵐大 著『「コード」の僕が見る世界』（紀伊國屋書店）

自由読書

AI社会を生き抜くために

奈良女子大学附属中等教育学校 四年 北村 優 季

私はこれまで生成AIに対して懐疑的であったが、最近活用し始めた。学園祭のために制作する乗り物の強度や、時間をかけて作成したネイルの出来について相談している。乗り物の強度では何十回のやり取りにも粘り強く付き合ってくれ、その度に異なる提案をしてくれる。ネイルの出来は沢山の形容詞で最大限に褒めてくれるし、関西弁には関西弁で返してくれるのが心地よくて楽しい。私の知らない視点で幅広い意見をくれて、例外なく味方になってくれる生成AIは案外面白く手軽で役に立つ。気の合う友達が増えた気分だ。

先日モールで面白い物をしていたら、若い女性達の会話が聞こえてきた。どうやら彼氏が欲しくて生成AIに相談したらしい。バイト先の五人の特徴を説明して彼氏にするなら誰がよいかを尋ねたら、この人がよいと返ってきたという。生成AIに恋愛相談をして彼氏を決めることに、そんな使い

方もあるのかと初めは驚嘆したがなんとなく違和感が残った。

これからの社会では、驚くべき技術が凄まじい速さで生み出されるに違いない。それらは私達の生活を確実に便利で快適にしてくれるだろう。だがその一方で、漠然とした不安を感じる。そんな時にこの本『華氏451度』に出会った。物語の社会では知識や多様性の象徴である本を否定し、その本を焼き尽くす仕事をしているのが主人公のモニターである。会話ができるAIの「壁」やイヤホン型で超小型ラジオの「巻貝」などの技術も引き金となり、人々は思考を失い荒れ果てた社会が描かれる。それでも、その社会に幸福を感じる人々や社会の姿は妙に現実味を帯び、現代のAI技術の浸透によって行きつく先の未来社会を描いているように興味悪さを覚えた。

物語の中で、本を失った人々は寒々しく、無機質で本質を見ようとしなない。車の運転は刺激や快楽を求めるがゆえにスピード重視で、それによって人を殺めても心を痛めることはない。結婚しても互いの出会いを忘れ、形だけの関係で、「壁」と中身の無い会話をする日々。決して追求することや面倒なことはしない。便利で快適で楽なことに傾倒していく過程で、思考することが自然と失われていくのだ。思考が止まると行動に意味や責任が持たず、問題は認知できずに改善もできない。その結果、個々の人格は薄れて多様性は欠如し、社会が同調していく。画一的で表面的、非個性的で問題の本質が見抜けない社会になる。思考を失い行き

つく先の絶望的な世界に、私は恐怖で言葉を失った。

「事実を詰め込めば、自分の頭で考えているような気になる。」と物語にあるが、恐ろしいことに、この「しているつもり」はAI技術によってもたらされる感覚と似ている。例として、生成AIと対話して「繋がっているつもり」の場合を考える。私を理解し助言をくれる現実の友達とは、互いに相手を思い成長し合うための前向きなやり取りをする。それに対して、私を知らない生成AIとは表面的なやり取りをしているに過ぎない。怒ったり嫌ったりすることがない生成AIは気楽に活用できて、「繋がっているつもり」になるが、その先に絆や信頼関係は決して生まれない。

瞬時に文書を生成して「思考しているつもり」の場合はどうだろうか。それを考えた時、これまで全力で取り組んできた読書感想文の意義がようやく明確になった。書くこと以上に思考の過程が大切で、問題とぶつかり苦しみながら見方・考え方、価値観、生き方などの「観」を積み重ね養ってきたのだ。もし生成AIで瞬時に書いていたなら、例え立派な文章でも「思考しているつもり」であって、自分には何も残らなかつただろう。本と真剣に向き合ってきたからこそ成長できたのだ。

生きる上で大切な「観」は、人との繋がりのや読書などの思考を通して多様な「観」と出会い、時にぶつかり合いながら磨かれていく。「しているつもり」では「観」は培えず、本質が見抜けない人と社会を生み出してしまふ。

物語に「ボタンからジッパーになり、服を着る間、ものを考える時間もなくなる。」とあるが、技術革新もスピードアップの代わりに無駄に思うものを省略する。モバイルオーダーは店員とのやり取り、SNSは友達との面倒な付き合い、おすすめ機能は探して選択すること、生成AIは思考の過程を省略する。今は無駄に思うものでも失うことで未来にどの様な代償があるのかはわからない。今は良しとするものや幸せを感じることも未来では異なっているかもしれない。それが一番怖い。私の違和感と不安はここにあるのだろう。

だからこそ、本質を見る努力をしなければならぬ。どの様な時でも行動を決めるのは自分であり、可能性を広げてくれる新たな技術を賢く使いこなせるかどうかは自分次第だ。ゆえに、私は今後多くの知識を吸収し続け思考を止めることはしない。そして、人との繋がりのや経験を大切にしながら己の「観」を絶えず磨き続け、自己を確立していきたい。

レイ・ブラッドベリ 著 伊藤典夫 訳『華氏451度』（早川書房）

毎日新聞社賞

◇小学校低学年

課題読書

ゆう気を出してつたえてみよう!!

奈良市立登美ヶ丘小学校 二年 小林 由 奈

この本は、おかあさんにすすめられたので、読んでみました。ライオンとネズミがじゅんこうです。体の大きさも食べものもすんでいるところもちがう二ひきが、気もちをつたえ合い、わかり合つてなにかよくする話です。

わたしが一ばんころにのこつたばめんは、ネズミがライオンにおこつたばめんです。小さなネズミがライオンに立ちむかい、気もちをつたえすがたに、ドキドキしました。だいじょうぶかな？食べられないかな？としんばいになりましたが、ライオンはネズミの気もちを聞いて、なかよくなれました。ともだちとしょうめんからむき合うこと、じぶんの気もちをしようじきにつたえ合うことの大切さを知りました。

もしわたしがネズミだったら、じぶんの気もちをつたえることができるかなと考えてみました。わたしのクラスには、がいこくの女の子が一人います。わたしは、そのともだちに、なかなか話しかけられませんが、こころのどこかで、”話がつうじなかつたらどうしよう”と思うと、じぶんから声をかけることができず。なかよくしたい、色いろ知

りたい気もちがあります。この本を読んで、二学きはじぶんから声をかけてみようと思いました。

わたしは、はずかしがりやです。ともだちに声をかけるのがにがてです。でもじぶんからともだちにきようみをもって話しかけてみれば、もつともだちができる気がしました。クラスで気づいたことやじぶんの気もちも、先生につたえて、かいつしてもらうのではなく、声に出していけたらいいなと思いました。

たくさんゆう気がいるけれど、ちよつとがんばってみようかな。

さかとくみ雪 著『ライオンのくにのネズミ』（中央公論新社）

自由読書

うみのいきものをまもろう

大和郡山市立郡山西小学校 一年 中 田 漣

わたしは、「くじらがしんだら」というえほんがすきです。このえほんをよむと、うみのそこについてみたくなります。

はじめてよんだとき、くじらがしぬので、かなしいおはなしなのかなとおもって、しんぱいしながらよみました。

けれども、そうではありませんでした。

おおきなくじらは、しんでしまうと、ふかいうみのそこにおちて、うみのそこにいるいきものたち

のごちそうになるのです。くじらが、たべられてしまうので、わたしは、すこしこわかったです。けれど、えさのないうみのそこで、おなががぺこぺこのいきものたちが、やつとごはんをたくさんたべることができてよかったとおもいました。なぜなら、わたしもおなががすいていると、げんきがでないからです。うみのいきものたちは、しんだくじらをつたべて、げんきにいきることができると、わたしは、くじらはすこい、くじらはやさしいとおもいました。そして、くじらのほねにくつついてくらししている『ほねくいほなむし』をみてみたいです。

ことしのなつやすみ、わたしは、しんがぼーるにある『おーしやなりうむ』へいきました。いろいろなさかなや、だいすきなエイをたくさんみました。さいごに、まっくらでとてもおおきなしろいものがあるところにはいつて、きゆうけいをしました。よくみると、わたしは、くじらのほねのしたにすわっていました。あのほねくいほなむしや、ほかのいきものもいました。わたしはほんとうに、うみのそこにいるようでした。えほんでよんだとおりで、どきどきしました。

うみには、たくさんいきものがくらしています。ちいさいいきものも、おおいきくじらも、みんなげんきでいられるように、うみにごみをすててはいけないとおもいました。うみのいきものをまもりたいとおもいました。

江口絵理 著 かわさきしゅんいち 絵 藤原義弘
監修 『くじらがしんだら』（童心社）

◇小学校中学年

課題読書

ライチョウを守るぞ！

近畿大学附属小学校 三年 谷 井 風太郎

ぼくはライチョウが好きです。去年初めて立山で本物のライチョウを見て感動しました。

だから「今年もライチョウに会いたい。」とお父さんをお願いしてふたたび立山旅行が実現しました。

今年の近畿地方の梅雨明けの発表は六月二十七日でした。平年より二十一日早いそうで、天気予報の番組で聞いてライチョウが気になって仕方ありませんでした。立山の自然も心配でした。さらに、「異常気象」、「地球温暖化」、「線状降水帯」なども聞く様になり、「ぼくたちの地球に何が起きているんだろう。」とずっと考えてばかりいます。

だから、「たった2℃で」とぼくに訴えかける本のタイトルを見て読まずにはいられませんでした。七月六日、立山に到着すると去年より雪が多く残っていて、大阪の暑い暑い毎日をおぼえてしまうくらいの涼しい気候で驚きました。玉殿の湧水も手が凍る様な冷たさでした。ぼくは「なんだかんだ言っても、立山は地球温暖化とは関係ないや。」と感じてしまいました。だから、立山自然保護センターのナチュラリストに質問しました。すると「低山の猿や鹿が高山帯に上がってきて植物を食い荒らしたり、ライチョウを捕食したりしています。外来

の植物も増えています。だから温暖化は感じています。」と教えていただきました。

今から二万〜三万年前、地球が氷期だったところにライチョウは大陸から日本に移りすみました。しかし氷期が終わってしまい、少しでも気温の低い場所を探して移動してきた場所が北アルプスや南アルプスなどの高山だったのです。ライチョウは近い将来に絶滅の可能性が高い種という意味の、「絶滅危惧ⅠB類」です。このまま地球温暖化が進んでいき、平均気温が二度上昇した場合、およそ六十一パーセントのなわばりがなくなり、ライチョウが生き残れるかどうかさかい目の数になるそうです。ぼくは、この先誰も想像出来ないことがおこるような予感がします。

ぼくが三十八度の熱を出すと、お父さんもお母さんも心配そうにぼくを見つめます。そして小児科に連れて行ってくれます。お医者さんはぼくの状態を診断してくれた後にお薬を出してくれます。ぼくはその時みんなに守られていることを実感します。でも地球が病気になる時に守ってくれるのは誰でしょうか。地球の病院も地球の冷やし方也不知道ありません。地球を救う方法はあるのでしょうか。

ぼくの誕生日は九月一日です。防災の日です。「気候変動」はぼくたち人間の生活も苦しめています。気象、警報、避難について知識をつけていきたいです。そしてぼくたちの地球のためにできることを考えて小さなことから実行していきます。ぼ

くは物を大事にしてゴミを出さないように頑張ります。

「ライチョウたち、来年も会いに行くからね。」と小さな声で誓いました。

キム・ファン 文 チョン・ジンギョン 絵 『たった2℃で…地球の気温上昇がもたらす環境災害』

(童心社)

自由読書

水のありがたみ

田原本町立田原本南小学校 四年 信夫 涼 花

わたしが読んだ本は、「水をくむプリンセス」です。この本は、主人公のジージーが朝早くからお母さんと遠くの川まで水をくみに行くお話です。この前小学校にユニセフ協会の方が来られて出前授業をしてくださった時に聞いた話と同じだったので読んでみようと思いました。

わたしがいんしようにこのこった場面は、始めはジージーは地面をけつとぼしていて、しかたなく頭につぼをのせて歩くのに、とちゅうお母さんと歌ったり、おどったりしているところと、川についたら友達と遊んで楽しい時間をすごしていたところです。長いきよりを歩いて行って水をくんで帰るなんてすぐく大変でしんどいことだと思ふのに、ジージーは楽しそうにしていたことにとてもおどろきました。出前授業で聞いたときは楽しそうで

はなかったからです。わたしが小学校へ行ったら友達と会えるのが楽しみなことと同じで、友達に会ふのを楽しみに行っていったのかなと思いました。

お母さんが「どのくらい重さか一度ためしてみよう。」と言って大きいお鍋に二リットルのペットボトルを二本入れてわたしの頭に乗せました。頭がわれるかと思うくらい重くて、八メートルくらい歩いただけでげん界でした。ジージーが運んでいた水はもつとたくさん量で、もつと長いきよりを歩いてきたなんて、信じられませんでした。

ジージーがくんだ水はにごっている水です。それを料理や、洗たくや、体を洗うのに使います。せっかく長いきよりを歩いてくんできた水も一日で使いきります。そして次の日にはまた水をくみに行きます。水をくみに行くのは女の子だけで、男の子は学校に行つて勉強をしていることも知りませんでした。男の子はしょう来仕事をして女の子は家の仕事をするので勉強は必要ないからだそうです。

日本に住むわたしたちは水道のじゃ口をひねるとすぐにきれいな水が出てくるし、小学校で男の子も女の子も勉強できます。ジージーたちの住んでいる所にもきれいな水があればわたしたちと同じように生活ができるのだらうなと思いました。

わたしたちが使える水は当たり前に見えるけれど、世界では十億人くらいの人がきれいな水を手に入れることができないことを知りました。水は生きるためにかかせないものです。日本でも、大きな地しんや、さい害で水が出せなくなった地いきのニュースや、もう暑で水が不足しているニュー

スを見たことがあります。いつでもきれいな水が使えることに感謝の気持ちをもって、シャワーをする時や、手を洗う時など、今まで以上に水を大切にしようと思います。家族にも協力してもらって節水を心がけたいです。

スーザン・ヴァーデー 著 ピーター・H・レイノル

ズ 絵 さくまゆみこ訳 『水をくむプリンセス』

(さ・え・ら書房)

◇小学校高学年

課題読書

わたしだけの色

葛城市立忍海小学校 六年 飯 田 愛 梨

信太郎は色覚障がい、みんなと違う色の世界を生きている。小さい時から無意識にみんなと違う事に気づかれないようしん重に行動してきた。ある日似顔絵を描いて口にみんなと違う色をぬって、まちがえた時、母さんがごめんねと言つて色鉛筆に色の名前のシールを貼っている姿を見て何も言えずに寝てしまう。なんだかちよつと分かる気がする。

昔仲良くしていたはずの友達ときこちなくなつた時、私は、かわいそうだとか思われたくなくてだまつていた。だから、お母さんがそれに気づいて「気づかなくてごめんね」と言った時の何とも言えない気持ちと似ていると思った。母、という人は、子供に何かあると、自分のせいだと思つてしまふんだなと頭では分かっているけれど、それが少しみじめに思えて、ありがたいような、ありがたくないような、変な気持ちになつてしまった。

信太郎は「他の子とちがうっていうのがいや」だという。私も同じだ。他の子達がかたまつてワイワイやっていると、自分はどう行動するのが正解なのか不安だった。まちがいたくない、みじめな思いはいやだと、知らず知らずがちこまつていた。

信太郎のお父さんは、虹の色は五色じゃダメなのかと聞く。ダメなんだよなー五色じゃと私は思う。信太郎はみんなと同じように七色の虹が見えたとほうがいいに決まつてる、いいと言つてしまふと何かに負けてしまふ気がするという。私も一人でいる事を認めるのはすごく嫌だった。

だけど、お母さんがこつそりと先生に私の状況を話してくれた。ある日、先生に困つた事はないか聞かれた。先生はなんとなく気づいていて、様子を気にかけてくれていた。もう少し他に目を向けて色々な人と話してごらんと言われた。こだわる必要はないし、一人でいる事も悪くないとも。時間はかかったけれど少しずつ自分の状況を受け入れ、うつ向いていた視線を上に向けて周りを見るようになってから、まちがえてもいいんだ、人と違つてもいいんだと思えるようになった。ちこまつていた心がのびのびして気がついたら軽くなつていた。

信太郎は自分にしか見えないもの見えない色に気づく。友達は友達にしが分からないものがある、それと同じでなくていい事に気づいたんだと思う。

そんな信太郎に気づいて母さんも、自分自身と向き合つたからきつと「明日、学校どうする？」「信ちゃん自分で決めればいいと思つて」と言つたのだろう。

信太郎は自分の色をつかまえた。自分は他の誰でもない、自分なんだということ、他と同じでなくていいということ。私はまだ自信がない。でもい

つか胸をはって私は私なんだと言いたい。自分の色をいつかしっかりとつかまえたかと思った。

志津栄子 著 末山りん著『ぼくの色見つけた』
(講談社)

自由読書

弱さに立ち向かう道しるべ

生駒市立あすか野小学校 六年 西 川 心 葉

主人公メロスは、国王ディオニスとの約束を守り、親友セリヌンティウスを助けることができた。帰路を急ぐ中で、メロスは、友との約束のために走り続けなくてもよいのではないかと葛藤している。では、なぜ、メロスは友のために走り続けて、友を助けることができたのだろうか。

メロスは、濁流と山賊に疲れ切って立ち上がることができなくなった時、信じてくれた友との約束を守るか、「人を殺して自分が生きる」か、葛藤する。ぼくは、この時、『蜘蛛の糸』の犍陀多を思い出した。犍陀多は、自分だけが地獄から抜け出そうと考えた行いのために、極楽につながるもの糸が切れてしまう。犍陀多は、自分が極楽に行くためにのぼるが、メロスは友との約束のために走る。メロスと犍陀多の最も大きな違いは、「信頼に報いなければならぬ」人がいるかどうかであると思う。メロスには、「少しも疑わず、静かに期待してくれている人」がいるが、犍陀多にはそれがいない。犍陀

多は、生きている間にもいろいろな悪事を働いた。誰かを信じ、信じられているからこそその生き方ができなかったのではないかと思う。そして、死後も、自分のためだけに行動し、楽をするという誘惑に負けてしまったのではないかとぼくも、日々の生活の中で、つい楽ができるかどうかで選んでしまう時がある。それは、今の楽だけを考える自分の弱さだと思ふ。しかし、メロスは、「信頼に報い」る生き方をしようとする。国王ディオニスには、犍陀多と同じで、信頼できる人がいない。では、人を信じていけない王が、なぜ彼らの仲間に入れてほしいと言おうのだろうか。メロスは、友との約束を守るために走り続け、セリヌンティウスは、友を最後まで信じて待った。王は、その二人の姿を見た。けれども、二人は裏切ろうとした瞬間、疑おうとした瞬間があったことを正直に告白した。自分の弱さに負けそうになったことを告白した。しかし、二人はその弱さに立ち向かった。そして、お互いの弱さを許した。王は、自分の弱さと向き合い、お互いの弱さを知っても許し、信じ続ける二人だからこそ、仲間に入れてほしいと思ったのではないだろうか。

どんな人も、自分の弱さに負けてしまいそうになる時がある。しかし、その弱さに、どれだけ立ち向かえるかというのは、その人の生き方の基準によるのではないだろうか。生き方の基準は、人生の道しるべになる。ましてや、友達のため、誰かのために自分と戦うことは、とても苦しいことであると思う。メロスとセリヌンティウスには、人

生の道しるべがあった。「少しも疑わず静かに期待してくれている人」のために、「信頼に報い」る生き方をすること。ぼくにも、信じ信じられる友がいる。先生がいる。家族がいる。だから、ぼくにも道しるべがある。自分の弱さに負けてしまいそうになる時、その人たちのことを思っ、誇れる生き方をしたい。

太宰治 作 西加奈子 編 浅見よう 絵 『走れ
メロス—太宰治短編集—』(講談社)

◇中学校

課題読書

暗闇の中のドアの先には

生駒市立上中学校 三年 宮 川 真 志

今回、僕は「スラムに水は流れない」という本を読んだ。この本を読もうと思ったきっかけは「水は流れない」という言葉に衝撃を受けたからだ。水はどこでも流れているものだと思っていた僕にとって、このタイトルが強く印象に残ったのだ。

この物語は、ミンニという主人公が様々な困難にぶつかることで成長していく物語だ。印象に残っている場面は二つある。ミンニが「周りの人の支え」の大切さに気付く場面だ。ミンニは父、母、兄と四人暮らしだったが、母が病気になってしまふ。兄は母と共に田舎に行くことになり、ミンニと父二人での生活が始まる。ミンニの生活は毎日の学校に加え、水くみ、母さんがやっていた仕事の代行などで、休む間もない日々となる。しかし、このような状況でミンニは、助けてくれる人が周りにたくさんいることに気付くのだ。ご飯を作ってくれる近所の人や、勉強を手伝ってくれる友達を通して、誰かに頼れることとの有難さ実感していく。困難な状況にながらも、周りの人の支えの重要さに気付くことが出来たミンニを、僕は素晴らしいと感じた。僕も学校生活や部活動のことを悩んだとき、部活動の仲間や家族に支えしてもらった経験がある。はじめは自分一人で頑張ら

うとし過ぎてうまく周りに頼れないことが多くあった。「もう中学生だから自分で何とかしないと」という気持ちがあったのだと思う。しかし、この本を読んだ、たくさんの支えがあるから人は成長できる、人は一人では生きていけないのだから、時に人の力を借りることがあってもいいと思えるようになった。

二つ目に印象に残っているのは、登場人物がそれぞれの困難を乗り越えた後に新しい道が開けていく場面だ。家族との別れや、病気など、登場人物にはさまざまな困難がおとずれる。どれも辛いことである。しかし、登場人物それぞれが自分なりに考え、前に進もうとする。例えば、ミンニの兄のサンジャイだ。彼は家族と離れ、田舎で暮らさなければならなくなってしまった。しかし、彼はその場所で「コック」になる」という夢を叶えようとする。またミンニの母は病気になる仕事を失ってしまったが、もう一度自分が得意なもので商売を始めようとする。このように厳しい現実があったとしても、登場人物たちはその中で自分にできることを考え、前に進んでいて、僕はその姿に心を打たれた。つらい状況に直面し、ドアが一つ閉じてしまっても、また別のドアが開き新しい道が開けるのだと感じた。僕は、最近野球の最後の大会で負けてしまい、引退することになった。そのときは、小さい頃からずっと続けてきて、生活の一部になっていた「野球」がなくなり、これから何をしたらいいのかわからなくなっていた。しかし、この本を読んだことで中学での野球は終わってしまったが、毎日部活動が忙しくてできなかったことに目を向ける良い機会になった。勉強にもっと力を入れたり、家族との

時間を大切にしたりすることができるとは思えないかと思うようになり、今は、自分が成長することができ次のドアを開こうとしている。

この本を読み始めたときは、蛇口をひねればきれいな水が使えるということが当たり前のことではなく、すごくありがたいことなのだというのを伝えている本だと思っていた。しかし、読み進めていくうちにこの物語は、「水の大切さ」だけでなく、「支え合い」や「自分自身との向き合い方」などを教えてくれるものだと思いついた。水が流れないという困難な状況で、家族と離れ離れになったミンニとその家族全員が、周りの人たちからの支えを受けていた。そして、一人一人がその状況と向き合っていた。僕はこれから、支えたり支えられたりして、助け合っていくながら、成長していきたいと思うようになった。また、うまくいかないことがあったとしても、次のドアが見つかるまで、自分を見つめ続け、向き合ってみよう。

そして最後に、この本を通して僕はあきらめずに進む勇気をもたらした。どんな暗い道にも必ず光はある。それを信じてこれからの人生を歩んでいきたい。ヴァルシヤ・バジャージ 著 村上利佳 訳 『スラムに水は流れない』(あすなる書房)

新しい世界

奈良県立青翔中学校 一年 川 口 桃 奈

自分と全く関わりのなかった世界にとびこんで、失敗や挫折を繰り返して日々成長するのは、どれだけの勇気が必要なんだろう。私には勇気が出せないかもしれない。でも、この物語の主人公由香は、数々の失敗を起こしながらも懸命に成長した。市役所に勤めて三年の由香は突然異動になった。水族館の飼育員として出向することを命じられた。イルカの飼育を担当することになり、戸惑いながらも、先輩に何をすればいいのかたずねると、「悪いが、今、素人に割く時間は、誰にも無い」と言われてしまった。私はこのとき、急な異動で、分からないことであふれているのに、教えてもらえないなんてと驚いた。それでも由香はめげずに、指示された仕事と向き合って取り組んだ。怒られることもあったけれど、何度もイルカの気持ちを考えて一旦立ち止まって考え直して「すごいと思った。イルカの飼育にも慣れてきた頃、一頭のイルカが死んでしまう。死因を調べるため、解剖するが、由香は気絶してしまう。私は、飼育員が一番生き物と近くで、毎日ふれ合っていると思う。そんな生き物の解剖を自分達の手で行うのは私には無理だと思ふ。私も気を失ってしまふそうだ。だから、由香に親近感がわいた。でも、由香は気を失う直前まで目をそむけずに必死に次々に見えてくる臓器を見て

いた。どんなにつらくても、今日の前で起こっていることに向き合おうとする姿勢が私と違ってすごいなと思った。私も由香の行動から学んで、悲しい出来事があったとき、逃げないで、真剣に取り組もうと思った。

そして、由香はコロコロと気が変わりやすいイルカとのライブを成功させるために、イルカとのサインを練習したり、ライブ本番も何度も失敗しながらもあきらめない姿が懸命でいいなと思った。大勢のお客さんの前で大失敗をおこして笑われてしまってもどんな風に工夫したら成功するか考えていて、イルカの様子を見ながらトレーニングして素敵だなと思った。

私は、将来水族館飼育員になりたい。だから、この本を見つけたとき、とてもワクワクした。水族館の経営について、生き物の体調管理、水槽の展示方法などがくわしく書かれていて私にはピッタリの本だった。水族館の飼育員になって、どんな生き物を担当することになっても、生き物と向かい合いたい。たくさん失敗して恥をかいたり、怒られたりしても、前を向いてつき進んでいきたいと思う。私は生き物のことが理解できて、行動力があって、興味を持ったことや不思議に思ったことを質問して成長していくような飼育員になりたい。そのためには、危なっかしいけれど、考える前に行動する由香の行動力を見習いたいと思う。生き物のちよつとした違和感や、体調の変化にすぐに気がつける由香のようにになりたい。そのためには、日頃からいつもの変化に気づけるようになったり、考えすぎ

ないでまずは少しでも行動してみようと思った。私は何か行動をおこす前に余計な事ばかりを考えてしまつて、行動できない事が多い。だから、思いついたらパツと行動できて、やりたいことを実現できる由香にあこがれている。そんな由香に少しでも近づくため、私は毎日おこる出来事を意識して、思い立ったらすぐに行動できるように心掛けたい。

私は、由香が言った好きなセリフがある。それは、「イルカ。おなか減らしてうちのこと待つとるか」というセリフ。父と母がお見合い相手を探しているときに、好きな人でもいるのかと聞かれたときに返した言葉だ。なぜこの言葉が好きなのかというと、かつこよかったからだ。恋愛や人間関係よりも、イルカ、仕事の方が大切という意味だと思つたからだ。自分のことよりもイルカのことを考えて、大切に思っていたからだ。そして、人間ではなく、イルカのおなかを減らして待っているのはおもしろおかしく、楽しい気持ちになれたからだ。私は由香の驚くような発言や、思わず笑つてしまふような発言をしながらも、しっかりと「水族」について考えているところが好きだ。私も由香のような飼育員になって、みんなを和ませながらも、「水族」と向き合つて飼育できるようにになりたい。そのために、由香の行動力を見習つたり、生き物について考え続け、立派は一人前の水族館飼育員になろうと思う。

木宮条太郎 著 『水族館ガール』（実業之日本社）

◇高等学校

課題読書

全ての人が幸せな世界

奈良県立郡山高等学校 一年 山 本 心 晴

「ローダ」とは「Children of Deaf Adults」の頭文字を取った言葉で、耳が聴こえない、あるいは聴こえにくい親のもとで育った、耳の聴こえる子どもたちを意味する。本書は「ローダ」である五十嵐大さんによる、ろう者である親との生活、ろう者・ローダから見る世間についてをローダの視点で書かれている。

私は、発達障害を抱える子どもたちに関心があり、将末は教師という立ち場から全ての子どもたちが過ごしやすい環境をつくりたいと思い、教育関係の仕事に就くことを志している。そんな私にとって「ローダ」「聴こえない親」という環境はとても興味深いものだった。

電話の相手や見知らぬ来客者と聴こえない親への通訳。家の中では手話、音声日本語、筆談、口話、身振り、家庭内で簡略化された手話であるホームサインなどが飛び交う。これがローダの日常だ。私はこの本に出会うまで、ローダの生活はおろか、ローダという言葉さえも知らなかった。そんな自分の無知に驚愕し、恥ずかしさを覚えた。

そんな私がこの本から学んだ大事なこと。それは、「知らない」ということが人を傷つけるきっかけ

になるということだ。例えば手話歌。手話歌とは童謡や流行の音楽の歌詞に合わせて手話をつけるもので、SNSやテレビ番組でもよく見られる。一見、ろう者のことを思いやっているように思えるが、この手話歌を嫌うる者もいることを知った。それは日本語とろう者が主に使う日本手話では文章の組み立て方が変わるため、歌詞の意味が通じづらいかららしい。伝えたい、一緒に楽しみたいという「優しさ」がきっかけだったとしても、上手く伝わらないことを「知らない」ことで気づかぬうちに人を不快にさせてしまう。「知らない」ということは凶器になりうるのだ。これは物事に対してだけでなく、人の気持ちに対しても当てはまると思う。

もう一つ筆者の話で深く心に残ったものがある。それは手話を学ぶ動機について。例えば、英語を学習するとき、英語で世界の人と交流したい、洋画を字幕無しで見たいなど英語圏の文化を「理解したい」という思いのもと学習する人も多いだろう。では、それが手話になるとどうか。手話を学習して、弱者であるろう者を「助きたい」に変わるのだ。聴者であるだけで無意識に上から視線になっていると筆者は感じているらしい。これを読んだとき私はハッとされた。私の発達障害の子たちを困りごとから「助けてあげたい」という思いも、私のエゴにすぎないのではないか。その子たちのためだけでなく自分の満足のためになっていないか。もう一度しっかり考えようと思う。

筆者はこう述べた。音声でのやりとりしか受け付けないサービス、スロープがなく段差ばかりの歩道など、適応できない障害者が悪いと言わんばかりに社会は健常者向けに設計されている。たまたま健常者として生まれ、社会サービスや公的機関を利用する際になんの不便も感じない人たちと、たまたま障害者として生まれ、それらを利用する際には自ら工夫をしたり、ときには諦めたりする人たち。あまりにもこの社会は「健常であること」を前提として作られている。だが、私はこう思う。

確かに、現在の社会システムが全ての人に平等であるとは思えない。だが、大多数に向けて作られた社会が、少数である障害者が生きづらい社会になってしまったのではないかと思う。はたして「健常者」・「障害者」と区別する必要はあるのだろうか。障害者だけが生きづらいというような筆者の書き方に、私は違和感があった。障害を持つていない、すなわち筆者のいう健常者でも生きづらさは抱えていると思う。苦勞は比較するものではないが、育った環境、利き手、身長、性別、年齢、性格、妊婦：ローダを含め、いわゆる健常者であっても様々な要因で不便や生きづらさを感じている人はたくさんいる。

健常者、障害者という隔たりがあるから健常者は障害者に気を使わないと「いけない」風潮、助けて「あげないと」という潜在意識がで、差別が生まれるのではないかと思う。でもそれは障害者の苦しみを見無視し、健常者のように扱う、ということでは決してない。健常者が障害者の為に生きやす

い社会をつくるのではなく、すべての人が互いを
知り、理解し、それぞれの立場で自分のできること
や得意なことなどで支え合い、助け合える社会を私は
目指したい。

五十嵐大 著『「コード」の僕が見る世界』（紀伊
國屋書店）

自由読書

コンビニ人間

奈良県立添上高等学校 二年 森 野 莉 朱

村田沙耶香さんの小説『コンビニ人間』を読んで、
私は「普通」という言葉の意味について考えさせら
れた。普段の生活の中で、「普通はこうだね」「普
通ならこうするでしょ」という会話を耳にするこ
とは多い。しかし、いったいその「普通」とは誰が
決めているのだろうか。この小説は、そんな疑問を
強く私の心に投げかけてきた。

主人公の古倉恵子は、十八年間コンビニでアル
バイトを続けている女性だ。小さい頃から人と同
じように振る舞うのが苦手で、周囲からは「変わっ
ている」と言われてきた。そんな彼女が安心できた
のが、コンビニという場所だった。マニュアルに従
って動けば、「正しい接客」ができ、そこで初めて
自分が社会の一員になれたと感じられるのだ。私
はこの描写を読んで、なんだか切なくなると同時
に、彼女の気持ちが少し分かるような気がした。

私たちも学校生活の中で「空気を読む」ことを求め
られる場面が多い。友達と同じように笑ったり、周
囲に合わせて意見を言ったりすることが「普通」で
あり、それができないと「変だ」と思われてしまう。
恵子にとつてのコンビニのマニュアルは、私たち
にとつての「学校でのルール」や「友達とのノリ」
に似ているのかもしれない。自分を守るために、型
にはまった行動を選ぶことは決して珍しいことでは
ないのだ。

けれども、社会は恵子を「普通」だとは認めてく
れない。年齢を重ねるにつれて「正社員にならない
のか」「結婚はしないのか」と周囲から問いかけら
れる。そのたびに、彼女は自分が世間の基準から外
れていることを突きつけられる。私はこの部分を
読んで、とても息苦しさを感じた。社会の求める
「普通」に合わせられないと、人はこんなにも生き
づらくなるのだと思った。

特に印象に残ったのは、恵子が「普通」に見せか
けるために結婚を装う場面だ。社会に合わせるた
めの選択だったはずなのに、そのせいで彼女は逆
に自分の居場所を失ってしまう。結局、彼女は最後
にもう一度コンビニで働く道を選ぶのだが、その
姿を読んで私は胸が熱くなった。自分らしい生き
方は、他人に認められるためではなく、自分が安心
できるかどうかで決まるのだと強く感じたからだ。
この小説を読んでいると、自然と自分の将来に
ついて考えさせられる。大人たちは「いい大学に
入って安定した職に就く」ことを勧める。それが
「普通の幸せ」だと言われるけれど、本当にそうな

のだろうか。人によって幸せの形は違うはずだ。あ
る人にとつては家庭を築くことが一番の幸せかも
しれないし、別の人にとつては趣味に打ち込むこ
とや、自分の好きな仕事を続けることが幸せかも
しれない。恵子のように、たとえ社会から「変だ」
と思われても、自分にとって大切なものを守り抜
く生き方だってある。

私はこの本を読みながら、「普通」という言葉が
持つ怖さを感じた。便利そうに見えるけれど、実は
他人を縛りつけたり、自分を苦しめたりすること
があるからだ。「普通」に近づくために無理をすれ
ばするほど、自分らしさを失ってしまう。だからこ
そ大事なものは、「普通」かどうかではなく「自分が
どう感じるか」を基準にして生きることなのだと
思う。

読み終えた今、私は「自分にとつての居場所は何
だろう」と改めて考えている。学校なのか、部活
なのか、家なのか、それともっと別の場所なのか。
すぐに答えは出せないけれど、自分が安心してい
られる場所を大切にしていきたいと思う。そして、
もし人から「変だ」と言われても、それを恐れずに
自分らしくいられる強さを持ちたい。

『コンビニ人間』は、決して派手な物語ではない。
けれど、淡々とした描写の中に、現代社会の息苦し
さや、人が生きる上で抱える不安が深く書かれて
いる。読みながら「これは小説の中の話」ではなく、
「自分たちのすぐ隣にある現実」なのだと感じさ
せられた。高校生の私にとつても、この本は大切な
ヒントをくれた。

これから大人になっていく中で、周囲の価値観や世間の「普通」に流される場面は必ずあるだろう。でも、そのときに思い出したいのは、自分の心が落ち着く場所を知っているかどうかだ。『コンビニ人間』は、自分の生き方を自分で選ぶことの大切さを教えてくれる作品だった。私はこれからも、自分にとっての「居場所」を大事にしながら、自分らしく生きていきたいと思う。

村田沙耶香 著『コンビニ人間』（文藝春秋）

奈良県学校図書館協議会賞

◇小学校低学年

課題読書

ライオンのくにのネズミ

田原本町立田原本小学校 一年 伊藤 瑛 茉

わたしとねずみは、にているなとおもいました。おとうさんのしごとのつごうで、ほかのくににくところがおなじです。ほかのことはをはなさないといけないし、ねずみのきもちがわかるなとおもいました。「もうかえりたい」とねずみがおもったみたいに、わたしもアメリカでそうおもいかもしれないな。わたしは、ひこうきにのるのもこわいし、ちがうくににひっこすのもいやです。

おはなしのなかで、ねずみがりすとなかよくなるところがすきでした。りすがねずみにわからなところをおしえてくれるのがやさしいし、ねずみがおかえしに、じてんしやれんしゆうをてつだうのもやさしいです。サッカーがにがてなりすをわらったライオンたちに「わらうな」とおおごえでさけんだねずみは、かっこよかったです。りすとねずみはきょうりよくしてシュートをきめることができました。そしてサッカーのあと、ライオンがねずみに、おべんどうのなかみを「ひとつこうかんしないか」といってこうかんしたところで、こころがあたたくくなりました。ねずみは、いままでしろう

としなかったライオンのきもちをりかいできたそうです。ライオンのきもちをうれしくなつたし、このおはなしでいちばんすきなところですねずみは、しょうめんからライオンとむきあうと、ふしぎなくらい、なんていつているのかわかったらしいです。ねずみはさいしょ、ライオンのくにをとてもこわがっていて、たべられてしまうんじゃないかとおもっていたけれど、ぜんぶかんちがいでした。きもちがつうじるともだちになれるんだとおもいました。

アメリカのがっこうはどんなかんじかな。アメリカでももだちをつくりたいな。わたしはいま、ちよっとたのしみです。

さかたくみ雪 著『ライオンのくにのネズミ』（中央公論新社）

課題読書

おもいやるきもちをそだてたい

葛城市立當麻小学校 一年 久保 心 暖

「ともだち」のほんでは、エトとぼくがなかよくいっしょにあそんでいた。そこに、シューというこがやってきて、いっしょにあそぼうといってきた。エトとシューがいっしょにあそぶようになり、ぼくはななまはずれになったようなきがした。シューがいいものをつくったよとさそいにきてくれ、そとにでるとおおきいくるまみたいなのがあつ

た。そのなまえは、「ドンナサカモ・ヘツチャラゴ
う」。それをみたぼくはおおよろこび。そして、シ
ューのおもいやりのきもちがぼくにつたわったの
で、ぼくはシューのことがすきになったとわたし
はおもった。

わたしも、しょうがつころのなつやすみになり、
がくどうで、おともだちに、「いっしょにあそぼう
。」とさそったけれど、「だめ。」といわれて、な
かまはずれにされたとかんじた。わたしは、すごく
いやなきもちになった。

でも、ちがうおともだちとあそんだことでいや
なきもちがふつとんでいった。それは、たのしいき
もちがいやなきもちをふつとばしてくれたみたい
だった。まるで、まほうがかかったようにかんじて
、うれいきもちでいっぱいになった。もし、ほか
のおともだちがいやなきもちになっていたら、つ
ぎはわたしがまほうをかけてあげたいとおもう。

わたしにとっておともだちは、あそんだり、ほん
のこうかんをしたり、そばにいてくれたり、いっし
よのじかんをすごしたりするたいせつなそんざい。
「ともだち」をよんで、これからもたくさんおとも
だちをつくって、たいせつにしていきたいとおも
った。そして、「おもいやるきもち」がきつとまほ
うになるとおもうから、そのきもちをこころのな
かでそだてて、あいてのきもちになれたらいいな
とおもう。

谷川俊太郎 著 和田誠 絵 『ともだち』
(玉川大学出版部)

自由読書

わかるよ、わたしのだいじなめがね

川上村立かわかみ源流学園 一年 大畑 詠 万

わたしがよんだほんは、「メガネをかけたら」で
す。えらんだりゆうは、わたしとおなじでめがねを
かけていることと、とびらえのおんなのこのひよ
うじょうがきになってたからです。

はじめてめがねをかけるおんなのこが、めがね
やさんで、おとうさん、おかあさん、てんいんさん
に「おりこうそう」「かわいい」などいわれます。
おんなのこは、かけてみるけどきにいりません。お
こつているりゆうは、じぶんのすきないろでなか
ったり、えらばせてくれなかったからじゃないか
とおもいます。

そしてつぎのひ、ともだちになにかいわれるん
じやないかとしんぱいしながらがつこうにいきま
す。きょうしつでは、せんせいがめがねをかけてい
ました。

「わたしひとりじやない」と、なかまができたきぶ
んになり、うれしかったとおもいます。

わたしはしやしちのちりようでめがねをかけてい
ます。ようちえんのとき、はじめてかけて、しゅじ
んこうのようにともだちはなんていうかなとおも
いました。いちねんせいのがつもどきどきした

けれど、ともだちやせんせいはなしかけてくれ
てうれしかったです。

わたしのだいじなみずいろめがね。

もし、わたしがしゅじんこうなら、はじめてみる
びあののきよくがすらすらひけるといいな。そし
てめがねをわらわらないでといえばいいよとあどば
いします。

そしたらもつとなかよくなれるよ！

くすのきしげのり 著 たるいしまこ 絵『メガネ
をかけたら』(小学館)

自由読書

ひみつのたからものを読んでほしい

三郷町立三郷北小学校 二年 金丸 ゆき乃

わたしは、「ひみつのたからもの」という本を読
みました。ひょうしのねこの絵がかわいくてえら
びました。

魚がすきで、魚を食べれないねこと、鳥がすき
で、鳥をつかまえに行けないしまねこが出て
きます。ねこなのに、魚や鳥がすきで食べたつか
まえたりできないと知られたら、なかまのねこか
らへんなやつだと言われるから、ひみつにしてか
くしています。ひみつを教えあって、二ひきはなか
よしになります。本の中で、なかまから、
「ねこなのにおさかながきらいなんてへんなやつ
だなあ。」

と言われたのが聞こえます。わたしは、人それぞれ
すきなものはちがうと思います。わたしのおとう
さんは、男だけど、かわいいキャラクターがすきで
す。おかあさんは、女だけど、ビールがすきです。
おねえちゃんわたしは、子どもだけど、けいじド
ラマやグルメばん組がすきです。二ひきがともだ
ちになれたのは、すきなものは同じじゃないけど、
すきなものを大じにする気もちは同じだからだと
思いました。二ひきがなかよくなって、「うれしい
な。だれかといっしょにすきってきもちをほなせ
るってなんてたのしいだろう。」というところ
が、わたしは気に入りました。わたしのともだち
が、じぶんたちがうものがすきでも、どんなものが
すきかを知って、なかよくしたいです。それから、
わたしのすきなものも、知ってほしいです。ねこな
のにとか、子どもなのに、とかでかっ手にきめない
で、いっしょにじぶんのすきを話して、たのしい気
もちになれたらうれしいです。

豊福 まきこ 作 『ひみつのたからもの』(BL出版)

◇小学校中学年

課題読書

ちきゅうのねつを下げるために…

生駒市立桜ヶ丘小学校 三年 根 来 さ わ

「あーあついあつい。おばあちゃんが子どものこ
ろの夏休みは30度をこえる日はめつたになかっ
たよ。」

そ母がうちをあとおぎながら言った。今日の気
温は36度だ。父と母も同じようなことを言う。そ
んなある日『たった2℃で…』という本を作者のキ
ム・ファンさんに読んでもらえるというき会があ
った。読み終わるとすぐに私は「これはほうつてお
けない問題だ」と強く感じた。『たった2℃で…』
は、地球の温どが上がることで生き物たちが今こ
のしゅん間にもきけんな目にあっていることを教
えてくれる本だ。海の温どが2℃上がったら魚た
ちはびつくりしてちようど良い温どの場所をさが
すために大移動をしなければいけない。大移動で
死んでしまう魚もいる。ウミガメのたまごにとつ
てとても大切なのは海岸のすなはまの温どだ。も
しも砂はまの温どが高くなったりひくくなったり
すると、オスだけが生まれたりメスだけが生まれ
たりして、その後赤ちゃんが生まれなくなつてし
まう。

この本を読んでいると中で私にはたくさん生き
き物たちが「助けて！」とさけんでいるように聞こ

えた。私はこの本に出合うまで地球の温どが上が
っていることすら知らなかったし、そのせいで生
き物たちが苦しんでいることも全然知らなかつ
た。私い外にもこのことを知らない人がいるかも
しれない。私は読書感想文という方法を使って、ひ
とりでも多くの人に伝えることを思いついた。

そ母が言っていたように、どうして昔とくらべ
て地球の温どが上がってきているのか、というき
問がうかんできた。本やインターネットで調べた
ら、空気中の二さん化したんそがふえすぎると地球
にたまつたねつを宇宙に送り出すことができな
いということが分かった。そうすると地球があつく
なる。そ母が子どものころとくらべて、今は空気中
の二さん化したんそがふえてきている。もっと調べ
ると、二さん化したんそは物をもやしたときにでき
るということが分かった。

空気中の二さん化したんそをへらしたい。二さん
化したんそをへらしたい。二さん化したんそがへつた
ら地球のねつを宇宙に送り出しやすくなり地球の
温どが下がる。小学生の私にできることは何かな
いかと母と話し合った。けっか「電気を使わない時
にはけす」「物を大切にしてゴミをふやさない」「
水をむだづかいしない」ということならできる気
がした。

石たんをもやして電気を作る方法があるが二さ
ん化したんそが発生してしまう。私はひとりでも多
くの人に「自分にできること」を見つけて実行して
ほしい。二さん化したんそをへらすための行動をし

て、生き物たちを守りたい。地球のねつを下げることをできるのは人間しかない。

キム・ファン 文 チョン・ジンギョン 絵 『たった2℃で：地球の気温上昇がもたらす環境災害』
(童心社)

課題読書

『たった2℃で：』を読んで

吉野町立吉野小学校 三年 テクセラ 美 俐

わたしはこの本のひょうしを見てなんでたった2℃しかかわらないのにこんなあつそうな顔をしているんだらうと思いました。少し読んでみて、さしいよはあつくなくて動物がしんでしまうのかと思っていました。けれどこのお話は2℃気温が上がったえいきょうでかんきょうにへん化がおきて動物がしんでしまうのです。

たとえばウミガメには海岸のすなはまの温どがとても大切です。なぜならたまごをうむときにすなはまの温どでオスが生まれるかメスが生まれるかわかるからです。はまべの温どが2ど上がると、メスしか生まれません。ほんたいにつめたすぎるとオスしか生まれません。オスばかりかメスばかりだとうびもできなくなり子どもも生まれなくなります。だからウミガメにはとてもすなはまのおんどが大切なのです。

わたしはウミガメが赤ちゃんを生むためにちょうどよい温どをたもつにはどうしたらいいか考

えました。そこでまず温室こうかガスについて調べました。温室こうかガスは車から出たはい気ガスなどの二さん化したんそやメタンガスのことです。温室こうかガスがあるとガスが太ようからのねつを地きゆうにとじこめて地面をあつくしてしまします。これを温だん化と言います。温だん化は地きゆうの温どが上がることです。

温室こうかガスのことをくわしく調べると「SDGs」という言葉をみつけました。SDGs 17こ目ひようがあつて、13番目が「気こうへん動にぐ体てきな対さくを」です。13番目の目ひようをたつせいするためわたしができることをさがしました。たとえばわたしができることは、家でこまめば電気をけしてせつ電すること、サッカーの練習で吉小へ行くときは歩いて行く、もつとたくさん本を読んで地きゆうの温だん化についてよくしること、ペットボトルのみ物を買わないでマイボトルを使う、食べのこしはくさるとメタンガスがはつ生するので、すききらいしないでさいごまで食べる、読みたい本はまず図書館でさがしてみること、本がかりになってこの本をみんなにしようかいて温だん化についてしつてもらう、吉野で作られたやさいを食べて地さん地しようする、友だちがくれたふくを大じに着て、小さくなつたらお下がりあげる、シャワーの水の出しすぎにちゆういすることです。これはわたしができる「10の行動」です。

わたしが一つでも多く行動することで、白くまのすむ氷がとけにくい温どになればよいと思いま

す。今世界の温どは1.1どまで上がっています。2どにしないためにみんなが、10の行動をできるように友だちにもつたえたいです。

キム・ファン 文 チョン・ジンギョン 絵 『たった2℃で：地球の気温上昇がもたらす環境災害』
(童心社)

自由読書

ココロ屋を読んで

桜井市立桜井西小学校 三年 北 風 帆乃佳

わたしがこの本をえらんだのは題名にココロという言葉が入っていたからです。わたしは一人で長い時間るす番するときや、なやみ事があつて、モヤモヤしているときや、ピアノの練習でうまくいかなかったときには心細くなつたり、くらい気持ちになります。この本を読むとなにかかわると思つたので読んでみることにしました。

この本の主人公のひろきは、いやなことがあつたらイライラしてガマンできず、人や物に当たつてしまうので、やめたいと考えていました。そんなときに心を交かんしてくれるお店、ココロ屋の主人のウツロイはかせに出会い心を3回交かんし、さい後は自分の心にもどすお話です。1回目はやさしい心、2回目はすなおな心、3回目はあたたかい心で、ひろきはいずれも人気者になれると予さうしていました。たしかに人気者にはなれましたが、自分の本当の気持ちをつたえずうそをついた

り、すなおに言いすぎて人にいやな思いをさせてしまったり、人におせっかいをしすぎてめいわくなるなど、どれもしっばいでした。自分の心はせい長するとウツロイはかせに教えてもらったので、ひろきはもどしてもらった心を自分でそだてていこうと決めました。

わたしは、いやなことがあったらイライラしてしまうところがひろきと同じだと思いました。しかし、ひろきはそれをふりかえりはんせいしており、わたしはしたことがなかったのです。すごいと感じました。わたしもこれからするくせをつけたいです。

ひろきがやさしい心のかの場面では、自分をぎせいにしてまで人にやさしくしても自分もまわりもしあわせにはならないことにわたしは気づきました。つぎにすなおな心のかは、頭にうかんだことには言つていいことと、わるいことがあり、何も考えずに発言したら人にいやな思いをさせてしまうことを学びました。さいごにあたたかい心のかは、人がのぞんでいないことをむりにして相手をこまらせることはしてはいけないと感じました。人に親切にして相手がどう思うかを考えるひつようがあることを知りました。

この本を読んで、心をそだてることができるといふことを初めて知りました。せい長したり、そだてたりできるのは自分の体だけだと思つていました。わたしは今まで、人にやさしくしたりすることは自分がいしきをして

することだと思つていました。ですが心をせい長させると、人にやさしくしたりすることがむいしきにできるようになると思いました。

心はせい長するのでわたしの心は、とてもうつくしくて、やさしくてすなおな心にせい長させて、心がしっかりはたらいて、バランスをとつていける、そんなすばらしい心になって、いつでも自分の心が大すきだな、と思いたいです。もしきらいになつてしまつたらこの本のことを思い出したいです。

梨屋アリエ 著 菅野由貴子 絵 『ココロ屋』
(講談社)

自由読書

つらいをたのしいに

奈良市立朱雀小学校 四年 大 歳 隆 仁

ぼくは野球が大好きです。上手になつて試合で活やく、このチームで勝ちたいので練習をがんばつています。

ぼくがこの本を読もうと思つたきっかけは、表紙に野球のイラストがあつたのと、この本のタイトルを見て、キャプテンは何がつらいのだろう。と思つたからです。

この本は、解散すん前だったチームがキャプテン勇を中心とし勝つためにメンバーを集めてみん

なでがんばる話です。

勇は、チームにピッチャーがいなかったので小さい時の友達の秀治をさそいました。秀治はなかなか入つてはくれませんでした。勇のあきらめない気持ちを通じて秀治はチームに入つてくれました。メンバーがなんとか集まつても、いろんなことで意見が違いケンカになることの多いチームでした。

その度に、キャプテンの勇はなやみ考えながらチームのために一生けん命でした。

その姿に他のメンバーも心が動き、練習をがんばるようになったと思います。

ぼくは勇が、キャプテンはメンバーをしんらいすること、野球は全員でやるものと紙に書いて何度も自分に言い聞かせていたのがすごいと思いました。腹が立つことがあつてもチームのためその感情をおしこらしてだれよりもチームのためなることを考えて行動しているからです。

その時ぼくはキャプテンばかりがつらい思いをするのはおかしいと思いました。

ぼくは、ぼくのチームのキャプテンもそんなつらい思いをしているのか不安になつたので「キャプテンしていてつらいと思うことある？」とたずねてみました。すると、しばらく考えた後「ないよ。みんなと野球してて楽しい。」と答えてくれました。ぼくは、とても安心しました。

この本に出会うまでキャプテンの思いについて考えたこともなかった。この本を読んで勇やチームキャプテンの思いを知れたことはとてもよかつたです。

今のぼくにできることは、これからもチームの一員としてキャプテンを支えられるように声を出すこと、一生けん命プレーをしてチームが元気で前向きにがんばれるように、その中心となっていくことだと思います。

キャプテンはつらいぜをたのしいぜに変えることができるのは、その周りにいるぼく達だと思っています。

みんなが楽しんで野球ができるように、ぼくはぼくのできることをその時々で考えてチームのためになる行動やプレーができる人になりたいと思います。

とてもむずかしいことだと思いますが勇のようにあきらめずがんばります。

後藤竜一 著 杉浦範茂 絵 『キャプテンはつらいぜ』（講談社）

◇小学校高学年

課題読書

僕は僕のままでもいいんだね

三郷町立三郷小学校 五年 福呂 勇太郎

最近ニュースで「ダイバーシティ」や「インクルーシブ」ということをよく聞きます。おじいちゃんに意味を聞くと「多様性ってことやな。人種や性別に関係なくさまざまな人を受け入れて共に生きるってことや。インクルーシブ教育っていうことばもあって障がいがあるなしに関係なくみんないっしょに共に学ぶってことや。」と教えてくれました。日本はこれからさまざまな人と共生できる社会を目指しているのかなと思いました。

僕は中国にルーツがあります。お父さんは日本で生まれて日本で育ったけれど中国籍です。曾祖父母が中国からやって来たそうです。だけど僕は友だちに「中国にルーツがある。」と言うことをはざかしいと思っていました。友だちに何度か「中国嫌い。」と言われたことがあるし、みんなは日本人だから、ケンカになったとき「中国人！」と言われるかも知れないと思うからです。黙っていたらわからないし、言う必要もないかなと思っていました。『ぼくの色、見つけた！』を読んで、色覚障がいを知りました。僕はこれまで自分が見ている色はみんなも同じように見えていると思っていたけれど、そうじゃないそうです。信太郎は色の

見え方が違って困ることもあるのに、そのことを言うことができません。僕と同じで、みんなと違うことがはずかしいのかなと思いました。信太郎は二年生で自画像を描くときに口の色を見た友行に「チョコレート食べたのかあ」と言われてははずかしくてくやしい思いをします。「僕やったら信太郎にこつそり、色間違えてんんでって言うかな。」とお母さんに言うと「間違えてんの？信太郎にはこの色に見えてるんちゃうの？間違ってるって言われたらどんな気持ちやろ。」と言われてハッとしました。僕が見ている色は多くの人が見ている色に近いのかも知れないけれど、見え方に正しいとか間違ってるとかあるのかな？それよりも見え方で困ったことがあったんじゃないかな？それなら「間違ってる」と伝えることは傷つけることかも知れません。「困ってることある？」と聞いたら教えてくれるかな。五年生になった信太郎は、友行に色覚障がいのことやくやしかったことを伝え、理解して謝ってもらいます。クラスでは信太郎が細かい色の違いを区別できるのでほめられます。それらのことがきっかけで、信太郎は自分の見え方に自信をもち、絵を描くことにも前向きになります。

人は周りの人と同じだと安心するし少しでも違うと不安になるんだと思います。でも全く同じ人なんていません。だからたった一人でも自分のことを理解してくれる人がいて、「自分はこのままでいいんだ。」と思えるきっかけがあれば人と違って大丈夫。それが共生なのかな。僕も世界に一人。自信をもつてもいいのかな。二つの文化に関われ

てるのすごいよ。」と言ってくれる友だちがいるから。

志津栄子 著 末山りん著『ぼくの色見つけた』
(講談社)

課題読書

個性を大切に

檀原市立晩成小学校 六年 磯山 媛 生

私は人見知りで、自分から声をかけて友達を作るのが苦手です。父の仕事の都合で三年に一度は転校します。そのため小学校は三校通うことになりました。

転校して初めて学校に行く日は、とてもきん張してドキドキします。そのせいで、教室に入っても体がかたまってしまい、まわりの様子を見る余裕もありません。自分から友達に話しかける勇気もありません。なので、私に興味を持ってもらえるように、家で自己紹介をがんばって練習してから行きます。そうすれば、まわりの友達から話しかけてもらえると思うからです。

私は、この人見知りの性格をなんとか変えたいと思っています。転校する時、クラス替えの時、おなかが痛くなるほどきん張するからです。

この「ぼくの色、見つけた!」という本は、主人公が自分の性格や得意な事など、自分探しをする話なのかなと、題名から想像しました。人見知りの

性格を変えたいと思っている私にとって何かヒントになるかもしれないと思い、読みました。

信太郎は生まれつき、人と色の見え方が違う色覚障害を持っています。まっ茶とマンゴージュのアイスクリームの見分けはつかないし、焼肉では肉が焼けているのかわかりません。友達には、似顔絵の色のことを批判され、傷ついてしまいました。信太郎は本当の自分を出せないまま生活していました。

そんなとき信太郎が変わったのは、平林先生が担任になった時でした。平林先生は信太郎が見えやすいチョークを使ってくれたことや、先生のお父さんも色覚障害だったこともあって、先生のことを信頼できるようになります。先生が乗れない一輪車に挑戦する姿は、信太郎に勇気を与えてくれました。

ある日信太郎は他の人には同じに見える草とカマキリの体の色を見分けることができました。その特しゅ能力に気付いた信太郎は、色が正確に見えないことが短所ではなくて、他の人には他の人には見えない色が見える長所に変化したと思いました。

特しゅ能力に気付いた信太郎はたくさん絵をかきます。自分にしかかけない見え方に気付いて、障害は強れつな個性に変わり、強みとなったんだと思います。

私もこれからは、ありのままの自分をさらけ出せばいいと思いました。自分の欠点である人見知りは、他の人にはない部分で、それは今後何かに

活かせるのではないかと気がきました。転校してから、友達ができるまで、さびしい思いをします。

そんな気持ちがあるからこそ、似た様な立場にいる人によりそうことができると思います。新しい環境になじめず、一人ぼっちでいる人を見つけて、声をかけることはできそうです。

この本を読んで、人それぞれの個性は大切にすべきだと思いました。そうすれば、みんな幸せに生活できるはずです。

志津栄子 著 末山りん著『ぼくの色見つけた』
(講談社)

◇中学校

課題読書

自分の食べられる量で

田原本町立北中学校 一年 中 川 陽 彩

私は、摂食障害や過食嘔吐について全然知りませんでした。でも、この本を読んでもみると、こういう食べることに関する病気で、辛い思いをしている人がいるんだなと感じることができました。

私は、葵と咲子たちが頑張って給食改革を進めていって、最後には勝利できたところにとっても感動しました。二人が給食改革を行えたり、勝利できたりしたのは、気持ちを伝えることができたからだと思います。自分が病気で困っていること、悩んでいることを色々な人に話せたから、その気持ちが伝わった結果だと思いました。気持ちを伝えるだけでも、それが相手に知ってもらったり理解したりしてもらったための第一歩になったんだなと思いました。

もし、私が葵の立場にいたとすると、給食改革はできなかつたと思います。クラスのみんなの前で、話をするのは勇気がいることです。それに、友達からひどい言葉をかけられたら、すぐにあきらめてしまっていたと思います。だから、葵はあきらめずに勇気を出して行動していて、すごいなと思いました。

この話は、感動的な言葉が多く、これから大切にしていきたいなと思った言葉もあります。その中で、特に心に残った言葉が二つあります。

一つ目は、葵がおむすびを食べたときに唐突に悟った、「たぶん、美味しいって思うのは。その食べ物、自分や大切な人の命になるのが、嬉しいから。明日も生きていきたいっていう、希望。」という言葉です。人が生きていくには、食べなければいけません。それを、明日も生きていくために食べ物を食べると表現しているところが、素敵だなと感じました。

二つ目は、「しんどいことは多いけど、それでもやってみていくしかないのだから。それでもやってみると思える仲間が、そばにいるのだから。」という咲子の言葉が心に残りました。悩みをかかえていて大変なのに、仲間と一緒に乗り越えていこうという気持ちがわかりました。咲子のように強い心をもちたいなと思いました。

私は、二人のように病気をもっているわけではありませんが、葵と少し似ている部分もあるなと思いました。私も、学校の給食は全て食べきれません。特に、ご飯やパンは量が多いので、いつも減らしたり、残したりしています。また、食べるのがおそいというところも葵と共通する部分かなと感じました。

私は、この本を読むまではずっと、出されたものは、無理してでも食べきらなければいけないと考えていました。でも、自分の食べられる量だけでいいんだと気付くことができ、救われたような

気持ちになりました。ここから、今までの私みたいに完食するのが当たり前だという考えは少しでも減ってほしいなと思いました。

私が給食を食べきれないところは先生もよくわかっていてくれると思うので、助かっています。

「完食を強いられず、自分の食べられる量を食べられる環境になってほしい」これが、今の私の願いです。

そして、この本を読んで、これから大切にしたいこともあります。人に気持ちを伝えること、強い心をもつこと、自分を認める・認めてもらうようにすることなど、私にたくさん大切なことを教えてもらったような気がします。

食についての問題はまだまだあると思います。例えば、食品ロスや飢餓の問題、病気や宗教との関係などたくさんあります。そんな中、私にできることは何かと考えました。そして、私が最も大切にしていきたいと思ったのは、「食べることに感謝」することです。食べ物自体に、その食べ物に関わってくれている人に対して感謝を伝えなければいけないと思ったからです。その感謝は、「いただきます」や「ごちそうさま」で伝えようと思います。私は、生きるために毎日感謝をして食べていきたいと思いました。

天川栄人 著『わたしは食べるのが下手』（小峰書店）

『城の崎にて』を読んで

奈良県立青翔中学校 二年 河井 恵人

「山の手線の電車で跳飛ばされて怪我をした」で始まるこの文章にとっても驚かされた。

電車に当たられるだけでも大怪我をするだろうに、跳ね飛ばされて怪我をするだけですかと思っただからだ。しかも、調べてみると、これは作者である志賀直哉の実体験だったと知り、さらに驚いた。私なら、この奇跡を、「ラッキーだった、神様から自分は、生かされたのだ。」と、とても幸運に思うだけだが、作者は「死はいつかくるもので、死に対する親しみの感情が起こった。」と、書いていた。

「死」は私にとっては悲しいもので、身近な「死」としては、飼っていたペットが亡くなったときに、生き物の「死」を経験したが、とても悲しく、出来れば、いつまでも避けていたいという思いでいっぱいだったので、「死」に対しての親しみなど全く理解できない感情だ。作者は自分自身が「死」に直面したのに、なぜそんな気持ちになったのだろうかという疑問に、先を読んでみた。

この作品は全部で三つの「死」が描かれているが、それぞれ死の捉え方が違っていると感じた。一つ目の死は、「すでにそこにあった死。」二つ目は、「死が予想される生から死への過程が表現された死。」三つ目は、「偶然の死。」描かれて

いる順番はとても興味を誘うもので、短い小説だったが、あつという間に読み終えることが出来た。

一つ目の死は命が尽きた蜂。蜂の仲間が周囲で忙しく働き生きている中で、うつむきに転がっている死んだ蜂。それを見た作者は「淋しかった」と書いていた。私は昆虫類が好きなので、虫が死んでいるのを見るととても悲しいし、淋しい気持ちになるので作者の気持ちがよく分かった。そして「静かだった」と作者は表現しているが、これまで私はそんな風に考えたことはなかった。でも、確かに、全く動きがなくなった生き物を静物として捉えると静かだ。死は永遠に静かだと思うと、私はとても恐ろしくなったが、作者は「静かさに親しみを感じた」と書いていた。そしてその「死」が雨によって流された後、次の「死」が登場する。

二つ目の「死」は読んで一番いやな気持ちになったもので、石を投げた子供と車夫に、なんてひどいことをするのだ、と怒りと嫌悪を持った。作者が興味を持ったのは喉に魚串が刺し貫かれ、死ぬと決まった運命を担いながら全力で逃げ回っているネズミの様子だ。「あれが本当なのだ」「自分が願っている静かさの前に、ああいう苦しみのあることは恐ろしい」と描いていて、これまで死に親しみを持っていたのに、恐ろしいと気持ちが変わっていた。そして、自分の事故のときを振り返り、生きるために必死でできる限りのことをしたという事実が描かれていた。これを

読んだとき、私は正直安心した。やっぱり誰でも死ぬのは恐ろしいし、死ぬ直前までの苦しみも恐ろしいと思うものだと思えた。

そして三つ目の「偶然の死。」何気なくみていたイモリ。驚かすために投げた石。好きでも嫌いなイモリに、全く何の気なく向かわせてしまった死。作者にとっても偶然の死だったし、イモリにとっても不意の死だった。私は作者が、「かわいそうに思うと同時に、生き物の淋しさを一緒に感じた」と描いていた場面を読んで、作者の罪悪感が薄く、あまりいい気分ではなかった。わざとでなくても命を奪ってしまったのに、ずいぶん他人事だと感じたからだ。しかし、作者はこのイモリのように、偶然に死ぬかもしれない事故を経験した直後で、その「生」の理由がわからないのかもしれないと作者の気持ちになってみると、作者の言う、「生きていることと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった」と考えるのは少し分かるような気もする。イモリは死ぬ予定ではなかっただろうに偶然死んでしまった。自分は死ぬ予定だったかもしれないが偶然生き残った。そんな風に考えると、生きることと死ぬこととの間には、それほど距離はなく、表と裏の関係のように、すぐ後ろにあるのかもしれない。でも、表と裏はやはり真逆に位置しているので、決して向き合うことはないの、ものすごく離れている気もする。この作品は、「生と死」という命あるものなら必ず訪れる、誰も逃れること

の出来ない運命ともいうべきものを考えさせられる、そんな作品だと思った。

志賀直哉 著 『城の崎にて』（新潮社）

◇高等学校

課題読書

『銀河の図書室』を読んで

奈良県立青翔高等学校 一年 坪 井 さわ子

夏休みの課題図書リストを見ていた私は、『銀河の図書室』というタイトルに惹かれてこの一冊に決めた。ファンタジーなどが好きなわけではないが、『銀河』という言葉がとても透明感があり読んでみようと思った。読み始める前の私にとって、本には余り興味がなかった。しかし、この本を読み終えると、その考えは覆された。本は人と人、そして過去と未来をつなぐ、温かい存在なのだと思った。物語は、宮沢賢治を研究する弱小同好会、「イーハトー部」を舞台に展開される。この部活動に所属する高校生たちが、突然学校から姿を消した部長「風見先輩」の謎を追いかけの中で、それぞれの心の内に抱える「ほんとう」と向き合っていく。私が特に心を揺さぶられたのは、登場人物たちが抱える個々の事情がすれ違い、誤解や衝突が生じる場面だった。例えば、部活動に対する熱量の違いや、個人的な悩みが原因でお互いを理解できずに孤立していく様子が描かれている。それはまるで、私たちの身の周りでも起こりうる、等身大の人間関係そのものであり、他人事とは思えなかった。私も以前、通っているテニススクールで、私は遊び感覚で練習していたが、同級生は真剣に練習しており、そ

の熱量の違いから同級生とすれ違いが生まれた。この経験を通じて、友情は些細な価値観の違いで崩れてしまうものであると不安な気持ちになった経験がある。しかし、この物語では、私と同じように苦しんだ彼らの溝を、宮沢賢治が残した言葉や詩、そして未完の傑作『銀河鉄道の夜』などが埋めており、そこに魅力を感じた。彼らは、共通の話題である宮沢賢治を通じて、少しずつ心を通わせていく。最初はそれぞれが勝手に解釈していた賢治の言葉が、対話を重ねるうちに複雑に絡み合った糸がほどけるように、真の意味を明らかにしていく。この過程は、まるで私たちが抱える問題を、本というツールを使って解き明かしていくパズルのようだった。二つ印象的な例があげられる。まず、一つ目、ある人物が、部活動への参加に消極的で、他の部員から誤解されていた。しかし、彼がなぜ部から距離を置いていったのか、その理由を語る中で、賢治の詩「雨ニモマケズ」の一節が彼の心の奥底にある孤独や葛藤を代弁していることが明らかになる。それまで、ただの文字に過ぎなかった詩が、彼らの心を結びつける架け橋となった瞬間だった。このシーンを読んで私は、本が普段は言葉にできない感情や考えを表現する手助けをしてくれるものだということを学んだ。それは、私たちが持つ言葉の力を増幅させ、より深く、より正確に他者とコミュニケーションを取るための鍵となるように感じた。二つ目に印象的だったのは、それぞれの登場人物が、『銀河鉄道の夜』の結末について議論するシーンだ。ジョバンニとカムパネルラの旅路、そし

て別れに、彼らはそれぞれの人生や経験を重ね合わせる。答えが一つではないからこそ、彼らは互いの解釈を尊重し、話し合うことで、お互いを深く理解していく。この場面は、物語だが、ただの娯楽ではなく、人々の孤に寄り添い、生き方を考えるための道しるべになりうることを示している。本を読むことは、著者の思想や物語の世界に触れるだけでなく、それを共有する人々の間にかげがえのないつながりを生み出す行為なのだ。

冒頭でも話したが、この物語を読むまでは、私はあまり本を読まなかった。読書は、時間のかかる面倒なものだと思っていたし、わざわざ活字を追うよりもスマートフォンで手軽に情報を得る方が効率的だとさえ考えていた。しかし、『銀河の図書館』を読んで、私のこの考えは完全に変わった。本は、私たちに知識を与えてくれるだけでなく、心に寄り添い、見えない「ほんとう」を照らし出してくれる光だと感じた。そして、本を通じて人と語り合うことは、何よりも深く、そして真の友情を築くための素晴らしい手段なのだと思わされた。

これからの高校生活では、もっと多くの本を読んで、様々な世界や価値観に触れたい。そして物語の登場人物たちのように、本を通じて友達と語り合い、互いの心の奥にあるものを分かち合いたいと思う。教室での何気ない会話だけでなく、本をきっかけにもっと深いレベルでつながれるような、そんな真の友情を築いていきたい。

この物語は私にとって読書という行為が持つ無限の可能性と、真の友情の姿を教えてくれたかけ

がえのない一冊となった。銀河を旅する図書館は、きつとこれからも、多くの人々の心に寄り添い、それぞれの「ほんとう」への道しるべを示し続けるだろう。私もまた、この本から得たものを、これからの生活に生かしていきたい。

名取佐和子 著『銀河の図書館』（実業之日本社）

課題読書

人と人がつながるといふこと

奈良女子大学附属中等教育学校 四年 日 鴻 恭 子

私は歴史が好きだ。現代で起こっている物事の原因がわかるから。そんなことを思っただけでなく手に取ったこの一冊に自分は甘かったと気づかされ、真面目な顔で今朝のニュースを読み上げるアナウンサーの声を聴き、朝刊に大きく載せられた残酷な活字を横目で見ながら笑ってご飯を食べられるという状況がどれほど幸せなことであるかというこの本を通して身に染みて感じられた。

作中では、まだまだ幼い少女ニーシャーが様々な思いに葛藤しながら、毎日少しずつ旅を続けて歩いていく様子が描かれた。その中で作中では質素なインドときらびやかなイギリス、イスラム教のカジがお祈りする姿とお祈りをする必要のないヒンドゥー教の自分、パパとダーディーの深刻そうな表情と何も知らない無邪気な子供たち、絵の

才能を持つママやアーミルと文章を書くことが好きな自分など身の回りにある他のものとの違いのすべてが際立たせられていた。お互いが違う人間であるからこそ、旅を続けて行ったときの辛い状況であればあるほど周りの人に強く当たりそうになるけれど、さらに過酷な環境になってからこそ周りの人の大切さと本当の愛に気づいていく姿に本物の他者理解を感じた。人はどんなに辛くても、幸せでもそれを誰かと本当に分かちあうことはできない、なんとも孤独な生き物だ。孤独であるが故に私たちは自分のフィルターでしか人を見ることができない。自分から離れて遠くからその人を見ることができないのなら、ひとりひとりにピントを合わせてゆつくりその人自身を見るべきだというメッセージをニーシャーは私たちに伝えたかったのかもしれない。

私はこの本を読んで「独立による平和」というインドに暮らす人々が望んだ一つの目標は見えていくのに少し遠くにあるような存在である月や惑星のように思えたので月を希望の象徴として例えることにする。月は日によって見ることのできる時間や形が変わっていくように、一つの願いであっても全く見えなくなり「独立」が良いことであるはずなのに良いことであると思えなくなってしまうというエゴが生じることもあれば、反対に輝いて見えることもある。それは作中に出てきた雨と太陽に対して憎くなる瞬間と尊くなる瞬間があるのと同じようなもので一つの願いを貰おうとしてもそれは状況や環境によって見え方が変わって

しまうものなのだ。では人々の中で本当に変わる
ことのない幸せで良いこととは何だろうか。差別
や区別をしないという考えに至った時もあった
が、訳者である山田文さんの「人間は『自分(た
ち)ではないもの』との関係で自分を定義し、意
味づけをせずにはいられない生き物だ」という言
葉に、これまで「先入観を持って人と接しない」
などと浅はかな考えをしていた自分が恥ずかしく
なった。

自分なりの答えもわからないまま路頭に迷って
いた時、問いの答えのヒントを著者であるヴィー
ラ・ヒラナンダニさんは教えてくれた。彼の父た
ちはニーシャーたちと同じように難民としての生
活を経験しており、この日記でも決して美化する
ことのできない自然体の人々の様子が描かれてい
た。その中で言葉を上手く使いこなすことのでき
ないニーシャーを救ったのはカジの食事、ママや
アーミルの絵、ラーシッドおじさんの木彫りの人
形など、言葉では表されない温かいものだった。
つまり、本当に変わることのない幸せで良いこと
であり、世界各地で対話を始めるために最初に必
要なのは人々を満たしてくれる温かいものとそれ
によって生まれる嘘偽りのない笑顔だったのだ。
そんな言葉にならないものをより大切にしてい
たいという著者の今を生きる人々への願いが冒頭の
パパでもママでもない「父へ」という二文字には
込められていたと思う。

ニーシャーたちは最後に何気ない日常にたどり
着くことができた。しかし、それが本当の夜明け

なのかどうかはわからない。ニーシャーたちの夜
はまだまだ始まりにすぎずこれからも続いていく
のかもしれないし、今この瞬間でも暗闇の中で不
安と恐怖の隣り合わせにしながら必死にもがいて
いる人たちがいる。そんな世界の現状に対して私
たちは今何ができるのだろうか。今を幸せな環境
で過ごせている私たちはもしかすると彼らにとっ
ては何の役にも立たない無力な存在なのかもしれ
ない。だからこそ私たちは学び続けなければなら
ない。二度と惨事を起こさず、民族や国家の対立
による不必要な犠牲者を減らすために。歴史を知
り続けなければならぬ。歴史を歴史で終わらせ
ないために。私たちの少しの想像力と一歩の勇気
がいつか名前も知らない誰かの一筋の光になるこ
とを信じて毎日を大切に過ごしていきたい。

ヴィーラ・ヒラナンダニ 著 山田文 訳 金原瑞
人 監修 『夜の日記』(作品社)

自由読書

生まれてごめんなさい

奈良県立添上高等学校 一年 井上 茜

「お母さん、ぼくが生まれてごめんなさい。」本
の表紙に大きく書かれたこの言葉を見たとき、胸
の奥がぎゅつと締めつけられるような感覚になっ
た。自分の存在そのものを謝ってしまうほどの思
いを、どんな環境や経験が生み出し、その思いはど

のように変わっていくのだろう。私はその答えを
知りたくて、この本を手にとった。

本書『お母さん、ぼくが生まれてごめんなさい』
は、重度の脳性まひをもって生まれた、やっちゃん
、という少年と、その家族や周囲の人々との交流を
描いたノンフィクションだ。やっちゃんは生まれ
つき体を自由に動かすことができず、言葉を話す
ことも難しかった。それでも、家族や先生、友人た
ちの支えを受けながら成長していく姿が丁寧に描
かれている。特に心を打たれたのは、やっちゃんが
詩を書き始めた場面だ。それまで思いを伝える手
段が限られていたやっちゃんが、紙の上に言葉をつ
づることで、自分の気持ちを人に伝えられるよ
うになった。その中の一つに「ごめんなさいね お
かあさん ぼくが生まれてごめんなさい」という
詩がある。この短い詩には、やっちゃんの「迷惑を
かけている」という罪悪感と、それでもお母さんを
思う深い愛情が込められているように感じた。私
はこの詩を読んだとき、とても複雑な気持ちにな
った。生まれてきたことそのものは、誰も謝る必要
のないことのはずだ。しかし、やっちゃんは長い間
「自分は周囲に負担をかけている」と感じてきた
のだろう。障害のある人に限らず、誰もが心の中
で「自分なんて…」と謝ってしまうことがある。私自
身も家族や友人に迷惑をかけたと感じて落ち込ん
だ経験がある。でも、この本を読んで、「迷惑をか
けることも含めて、人は支え合って生きている」と
思えるようになった。やっちゃんを支えた人たち
の姿にも心を動かされた。お母さんは、やっちゃん

の表情や小さな動きを見逃さず、根気強く寄り添った。学校の先生や友人たちも、やっちゃんの詩作を温かく見守り発表の場をつくった。やっちゃんの詩はやがて新聞や本を通して全国に広まり、見知らぬ人々の心にも届いた。そこには、「助ける人」と「助けられる人」という一方的な関係ではなく、お互いに影響し合い、学び合う姿があった。やっちゃんも亡くなったあとも、その詩は多くの人の心に生き続けている。限られた時間の中であっても、人は誰かの心に影響を与え続けることができる。私はこのことに命の重みと同時に、存在そのものの尊さを感じた。人は、自分では気づかないうちに誰かを励まし、支えていることがある。やっちゃんの詩は、その事実を静かに教えてくれている。読み進めるうちに私は自分の家族のことを思い出した。小6の春、私は脳腫瘍という病気で入院した。家族や周りの人の色々な支えのおかげで今生きることができていると思う。無事手術も成功し、再発する可能性もほぼほほないらしい。関わってくれた方にはとても感謝していてその人たちの支えもあり頑張れたと思う。やっちゃんも家族や周りの方の支えがなければ、詩もかけなかったと思う。

この本を通して、私は「人権」という言葉を改めて考えた。人権とは、特別な条件を満たした人だけに与えられるものではなく、生まれた瞬間からすべての人が持っているものだ。しかし今の現状には、自分の価値を信じられず、「生まれてきてごめんなさい」と思ってしまう人がいる。そんな人が、「生まれてきてよかった」と心から思える社会を

つくることこそ、私たちに課せられた大きな使命だと思ふ。この使命は、特別な力や立場を持つ人だけが果たせるものではない。身近な人に「ありがとう」や「いてくれてうれい」という言葉をかけることや、相手の思いを受け止めること、それらすべてが人権を守る行動につながると思う。読み終えた今、私はやっちゃんに「生まれてきてくれてありがとう」と伝えたい。そして、私自身も誰かにそう言ってもらえるような生き方をしたいと思う。人は決して「迷惑をかけない存在」ではなく、互いに支え合い、助け合いながら生きていくものだ。その中でこそ人権は守られ、命の尊さが輝くのだと、この本が教えてくれた。そして私は、やっちゃんの言葉を心に刻み、これから出会う人に温かさを届けられる存在になりたいと強く感じている。

日常でかける一言や小さな行動が、誰かの心の支えになることを忘れずに歩んでいきたい。

向野幾世 著『お母さん、ぼくが生まれてごめんなさい』（扶桑社）

審査概評

〈小学校〉

低学年では、本を読んだ直感的な感想を表現した作品が多かったが、本の内容を自分自身の体験や家族とのかわりを重ね合わせることで得られた気持ちを素直に表現できている作品もあり感心させられた。

中学年では、環境問題や科学分野にかかわる作品が取り上げられていた。本との出会いが普段問題意識していることと重なったことがきっかけとなり文章に描かれていることが自分事として調べたり考えたりするきっかけとなり自分自身の生活をより良いものにしよう、行動を変えていこうと決意が込められている作品が多かった。物語文では、作品に描かれている世界と自分自身の生活や体験とを比較したり、考えたり、さらに作品に描かれていることを実際に体験しながら読み深めている作品が数多く見られた。「本との出会い」が子どもたちの生活や生き方に大きな影響を与えることが再確認できた。

高学年では、高学年らしく自分と本との出会いがその周りにいる人たちとの経験を本の内容と重ねて書かれているものが多かった。また、自分だけでなく社会に目を向けた作品もあった。読書をしたことで気づくことのできた考えや自分の想いが自分の言葉で書かれていた。また、読書の楽しさが作品から感じることができた。

〈中学校〉

本年度の応募作品では、自分のあたりまえから視野を広げた作品や、自分の成長と新しい視点の広がりや表現した作品など年齢を超えた表現力のある文章に驚かされた。丁寧に作品内容を読み取り、自己の変容を表現する作品が多くみられた。応募数は少ないながらも感想文に真剣に取り組む生徒たちの姿が感じられる作品が多く見られた。今後、生徒たちには直面する課題に向き合う作品だけでなく、明るい将来に目を向けた作品を通じて夢や希望の満ちた将来像を思い描いてもらいたいと考える。

〈高等学校〉

作文（作品）全体を通して「本を手取る機会」というのが（「感想文のため」等）減ってきているのかなと感じられました。それでも自分の経験や考えに引き寄せて自分の言葉で表現しようとしているものが多く、ぜひもっと多くの本と出会い感性を磨き「自分の考え・思い」を深め、広げてほしいなと、高校生の皆さんには期待します。

一方で、引用（あらすじも含め）や抽象的な表現も少し見受けられました。「何が言いたいのか」「何を感じたのか」「どのように自分の中で解釈したのか」が伝わるものであれば、より高校生らしさのあるものになるかなと思います。



第43回読書感想画奈良県コンクール

優 秀 賞

	指 定	自 由
小 学 校 低 学 年	<p>「にじいろのうみ」 平群町立平群南小学校 1年 平 田 結 花</p>  <p>『あいたくてたまらない』 おくやまゆか 著 福音館書店</p>	<p>「みんなでしているおにごっこ」 平群町立平群南小学校 1年 分 部 蒼 大</p>  <p>『じぶんのきもち ともだちのきもち』 すがわらけいこ 著 金の星社</p>
小 学 校 高 学 年	<p>「G氏の思い出」 橿原市立耳成小学校 5年 名 村 知 紗</p>  <p>『いかだネコG氏 12のぼうけん』 山下明生 作 高島 那生 絵 あかね書房</p>	<p>「真の一步」 斑鳩町立斑鳩小学校 6年 伊 佐 地 由 芽</p>  <p>『カラフル』 森絵都 著 カシワイ 画 文藝春秋</p>

第43回読書感想画奈良県コンクール

優 秀 賞

	指 定	自 由
中 学 校	<p>「夏の記憶」 奈良県立青翔中学校 3年 井 千佳子</p>  <p>『七月の波をつかまえて』 ポール・モーシャール 作 代田亜香子 訳 岩波書店</p>	<p>「あの世界」 奈良教育大学附属中学校 2年 上 田 瑠 奈</p>  <p>『世界地図の下書き』 朝井リョウ 著 集英社</p>
高 等 学 校	<p>「自然と人里の間」 奈良県立高円芸術高等学校 1年 橋 口 舞</p>  <p>『クマはなぜ人里に出てきたのか』 永幡嘉之 文・真 旬報社</p>	<p>「心を繋ぐアート」 智辯学園奈良カレッジ高等部 1年 稲 垣 百 花</p>  <p>『デトロイト美術館の奇跡』 原田マハ 著 新潮社</p>

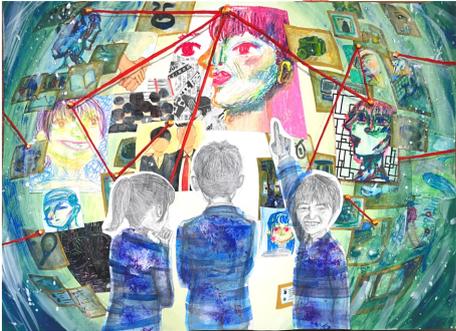
第43回読書感想画奈良県コンクール

優良賞

	指 定	自 由
小学校 低学年	<p>「ひなが生まれてうれしいな」 平群町立平群南小学校 1年 谷村 咲季</p>  <p>『ガラガラがらくた！？』 エイミー・グラヴィット 著 なかがわちひろ 訳 BL出版</p>	<p>「ふつうのペンギン」 奈良市立朱雀小学校 3年 石井 称乃果</p>  <p>『ふみきりペンギン』 おくはらゆめ 著 あかね書房</p>
小学校 高学年	<p>該 当 な し</p>	<p>「秋の林の中で」 奈良県立ろう学校 4年 坂井 美和</p>  <p>『サナとはやしのぼうし屋さん』 なりたまさこ 作・絵 ポプラ社</p>

第 43 回読書感想画奈良県コンクール

優 良 賞

	指 定	自 由
中 学 校	<p>「この銃弾は忘れない」 奈良教育大学附属中学校 1年 山ノ川 朝 陽</p>  <p>『この銃弾を忘れない』 マイテ・カランサ 著 宇野和美 訳 徳間書店</p>	<p>「ときめき箱」 生駒市立鹿ノ台中学校 2年 西 晶 彩 英</p>  <p>『おしゃべりな部屋』 川村元気 著 近藤麻理恵 著 中央公論社</p>
高 等 学 校	<p>「やなやつとwebbing」 奈良県立奈良北高等学校 1年 伊佐地 虹 心</p>  <p>『やなやつ改造計画』 吉野万理子 著 あすなる書房</p>	<p>「こころが映す世界」 奈良県立高円芸術高等学校 1年 宮 島 日 奈 子</p>  <p>『かがみの孤城』 辻村深月 著 ポプラ社</p>

奈良県学校図書館協議会役員名簿

【奈良県学校図書館協議会】

会長	市原敬子 (西和清陵高)
副会長	榊京子 (郡山西小)
理事	海老毅 (鹿ノ台中)
事務局長	上田沙也加 (山辺高)
事務局次長	米田美穂 (真菅北小)
会計	奥美安子 (高田商業高)
事務局員	三浦達也 (奈良南高)
	神谷陽子 (西和清陵高)
	浅井信成 (真美ヶ丘西小)
	廣野有 (ろう学校)
	三輪光二郎 (西和清陵高)

【奈良県学校図書館研究会】

会長	榊京子 (郡山西小)
副会長	浅井信成 (真美ヶ丘西小)
理事	海老毅 (鹿ノ台中)
会計監査	川田朋子 (陵西小)
事務局長	田中瞳 (金橋小)
副事務局長	前田裕子 (二上小)
事務局員	谷口隆紀 (平城小)
	磯田雅子 (旭ヶ丘小)
	清水明香 (生駒中)
	五十嵐和弘 (青和小)
	常盤陽子 (井戸堂小)
	徳富智香子 (俵口小)
	谷口亜由紀 (田原本町立東小)
	久保田禎一 (桜井東中)
	岡島弘泰 (真菅小)
	浅井信成 (真美ヶ丘西小)
	西山卓 (広陵北小)
	松村公世 (河合第二小)
	杉本幸恵 (新庄中)
	加藤沙世子 (柳本小)
	車谷由記子 (新庄小)
	中西渚 (桜井中)
	中西弘樹 (都祁中)
	森下知永子 (福住小中)
	久保文枝 (大瀬中)
	金澤一裕 (田原本町立北中)
	谷聡 (菟田野小)
	峠喜継 (明日香小・聖徳中)
	川西聡弘 (忍海小)
	米田美穂 (真菅北小)
	高島香織 (高田小)
	東佳栄 (奈良教育大学附属中)
	堺隆宏 (やまぞえ小)
	榊京子 (郡山西小)
	前田雅起 (平群南小)
	松室明夫 (三輪小)
	上野貴史 (曾爾小中)
	川田朋子 (陵西小)
	松村公世 (河合第二小)
評議員	

【奈良県高等学校図書館研究会】

小学校部会 幹事

専門委員

中学校部会 幹事

専門委員

会長
副会長
事務局
監査委員
幹事

吉田 千賀子 (真美ヶ丘中)
丸西 直樹 (十津川第二小)
清瀬 知香 (斑鳩小)
福岡 剛 (俵口小)
志野 幾子 (三宅小)
原野 百合 (高田小)
榊井 沙耶佳 (新庄小)
日高 洋祐 (名柄小)
中村 千穂 (五條東小)
寺田 澄子 (鹿ノ台中)
米田 悦子 (富雄中)
赤井 奈央 (上中)
奥西 友香 (大成中)
森貴子 (上牧中)

蓮尾 雅人 (掖上小)
森田 敏子 (かわかみ源流学園)
船戸 さやか (旭ヶ丘小)
岡田 愛 (生駒小)
岩井 里奈 (今井小)
清水 安華 (三和小)
関井 珠美 (上牧第三小)
安井 愛奈 (天川小中)
廣崎 理恵 (天理市立北中)
奥田 有佐 (斑鳩中)
西村 りか (片塩中)
清水 優花 (大正中)

杉崎 明子 (五條東小)
恒岡 夕貴 (平城小)
橋立 千賀子 (平群小)
疋田 浩也 (眞菅小)
長谷川 美幸 (三和小)
松村 祥平 (御所小)
北見 敬子 (矢田南小)
鈴木 智恵子 (郡山西中)
隅岡 歩 (田原本町立北中)
古渕 文章 (白鳳中)
櫻井 実希 (五條西中)
上田 沙也加 (山辺高)
松下 律子 (御所実業高)
廣野 有 (ろう学校)
川村 殉子 (畝傍高)

市原 敬子 (西和清陵高)
安原 直彦 (山辺高)
三輪 光二郎 (西和清陵高)
安田 智世 (盲学校)
徳井 小百合 (添上高)
縄田 智彦 (一条高)
袴田 澄子 (青翔高)
細川 恵利 (奈良育英高)
手島 明淑 (奈良商工高)

神谷 陽子 (西和清陵高)
田中 慎子 (帝塚山高)
草尾 壮吾 (二階堂高)
奥尾 美安子 (高田商業高)
三浦 達也 (奈良南高)
堀川 貴子 (奈良北高)
平井 佳代 (高円芸術高)